

らすこと。

(二)高學年——讀譜記譜其他音樂的教養も相當に出来るやうになつた尋五六又は高等にて——やらすこと。

(一)低學年よりの作曲

低學年(尋一・二・三)より創作的態度、作曲の心持を指導養成して行く事は眞に結構な事と思ふ。

然し之には種々の困難が伴ふものである事を覺悟豫想し、尙其困難に對する適當なる準備見識を持つてゐなければ、たゞ流行につれやつて見る位ひの考へでは危険極まるものである事を十分に考へて居らねばならない。

緒論第二章に於ても述べたが如く、同じく藝術教科にしても圖畫や・綴方・手工等は比して數倍する音樂獨特の困難さ、即ち音樂の抽象性と瞬間性との困難がある。即ち音樂は他の藝に術比し、最も抽象的なる事が其本質である限り、具體性を希求する普

通の人間——殊に兒童而も幼年兒童には、この抽象性が最も困難を來すものであらうと思ふ。——(唱歌・童謠等即聲樂は歌詞を伴ふから餘程具體化されるけれど)又後から

直に消失する性質の點も、指導に頗る困難な點である事は申す迄もあるまい。

從つて起る第二の困難が即ち其低學年である處に存する。如何に抽象瞬間のものでも、相當音樂的修養を経た高學年であれば、其理解にも把握にも容易であるが、記譜する事も出来ない間に於ける作曲指導は頗る困難である。教師が把握記譜してやればよいとしても、音樂的教養淺きため其要素に明確を缺き、即ちタイムや音程等が不確實であつて、如何様に把握記譜してやつてよいかわからない事が多いのである。

尙最も私の疑問とする點は、藝術的表現と其手段との關係に存する。即ち藝術的表現をなさんとする——産れ出でんとする——思想感情と其思想感情を表現する手段との本質的關係より眺めて、果して低學年に可能なりや否やといふ問題である。元來音樂の表現手段なるものは頗る限定されてゐると私は思ふ。勿論本質的には限定される

性質のものでないけれど、今日現在の音樂の如き音樂として表現せんとするからには、餘程制限された範圍内の手段を手段としなければならぬ。即ち今日の音樂の音階、樂器、譜——(把捉記譜の手段としての)等に可能の範圍に於てのみ、教師に於ても聽取記譜してやれるのであつて、然らざる時は全く如何ともする能はず、聽き覺へておらなかつたら消へてしまふものなのである。然も其低學年兒童の作る物、産み出すもの表現するものは、決して前述の範圍内に止まらないのが本當である筈である。即ち現在音樂の教養を受けたものならいざ知らず、さうで無い限り彼等は前人の未知未聞の音階で謠ひ出すかわからない筈であるし、其音階を基とした樂器でなければ奏し得ない、又特別の記譜法でなければ記譜し得ないといふやうな、即ち地球上には今迄嘗て無かつた天國地獄、星の世界の音樂的手段を以て歌ひ出すか知れないのである。どうして日本樂或は西洋樂的手段方法にのみ丁度合致したものが出る事ぞせう。そんな自由に表現された彼等の音樂を、どうして吾々が吾々の音樂的手段で把捉したり記

譜したり出来るか。私はかく兒童(既存音樂的教養なき者)の表現は、全く自由なために、吾々にはそれはほんの一瞬间、聽く事が出来るだけか、聽き覺へておくのでなければ消失してしまふものである筈だと思ふから、全く西洋音樂的教養なきに等しき彼等低學年兒童の作曲指導は、たゞ一度歌はすとか聽き覺へるとかいふ範圍の外には、不可能の事だと思惟する。

換言すれば、現在の音樂的手段(音階・記譜等皆)に自由になる迄、即ち相當現在の音樂に接して其精神手段方法等に慣れて、又自由に之を使用統御出来るやうになる迄は、現在音樂の如き手段をもつての音樂は産れ出ないといふ事になる。洋樂に接した事なき兒童には、長音階等をもつた音樂が生れ出ない筈である。俗謠等によつて多少慣れてゐる日本音樂的手段を以てならいざ知らずだが、之も到底十分でない。要するに比較的既存音樂の教養に乏しき彼等低學年兒童に、既存音樂の如き音樂、即ち吾々の記譜出来る音樂が産れ出難からうと思ふ。一年間や二年間の教養では、やはり

五十歩百歩である。

私はかゝる意味に於て、低學年よりの純作曲指導は頗る困難無謀の事であると思ふし、出來得るとしてもたゞ一瞬間歌ひ一度聴き、然して聴き覺へておくにあらざれば消失するといふ範圍に於てのみ可能だと思ふ。勿論現在の樂器等に合さう等と思ふのは兒童の自由を頗る束縛する事である筈である。

及殆ど教師が先に立つて導き出すやうにするならば、簡単な作曲位は出來やうけれ共、それは決して自由な表現ではない。即ち手段に自由になつてから其手段を以て表現するのは、其手段の範圍内に於ての表現であつても、自由であると共に藝術的だとも創作的だとも言へるが、手段に不自由の中、不慣れの中又は自己の統御してない手段によつてのかゝる表現は決して自由でなく、従つて藝術的でも音樂的でもあり難い事となる筈である。

要するに低學年よりの作曲は、殆ど本質的に出來難いものであり（家庭音樂が進ん

で入學までに音樂的修養が大に出來てゐるやうな時代になれば別として）出來得るとしても、それは洋樂や日本樂に——即ち既存音樂に一致さそう等とするのは不合理であつて、單に音樂といふ大きな範圍内のものである筈である。然し其時には、聲帶といふ樂器と耳のみは其音樂に關與する事は出來るが、既存の樂器や樂譜等といふものは、全く役に立たない筈のものと考へねばならない。即各個人獨特の新音樂が生れ出る筈である。（原始時代の音樂發生と同一である）其指導が吾々に出來るか、私は又頗る困難を感ずるのみならず、到底不可能だと思ふ。既存音樂の手段に相當自由になり其手段を以て表現作曲する頃になる迄の間は、吾々には指導は不可能の筈である。然らざれば指導は束縛となるのである。

(二)五・六・年頃よりするもの

相當の期間、或程度の音樂的修養をなして其音樂——小學校等では西洋音樂——の手段・方法・要素に相當慣れて自由になつた頃、即ち其音樂の音階とか音程、記譜力と

かタイム、拍子の力等に相當自由になつてからは、其音樂の表現手段を以てする作曲は或程度に於て可能である。即ち洋樂的手段に表作現曲も、入學當時より系統的に西洋音樂的教養を受けてある兒童ならば、尋五六年頃になれば或種のものも出來得るのである。又其教授指導等も吾人に比較的可能となる譯であつて、殊に記譜力が出來てからの指導は大層樂であらう。

私もかゝる試みの結果として相當の結果を得てる。以下之が方法を三項に分ちて述べて見やう。

A、豫備的教育

眞實の意味に於ける作曲教授をなす以前に於て、作曲に當つての基礎的豫備的に必須なる事を十分練習練習しておく事である。如何なる事柄が作曲の基礎として必要であるかを擧げて見ると、

(1)音階音程の確實と自由。

(2)拍子やタイムの觀念の正確なること。

(3)聽音的能力。

(4)記譜力——略譜にても本譜にてもよし。

(5)感ずる事の練習。

大體この五つになると思ふ。即ち之等の事柄が大體出來てゐるならば、作曲教授も左程困難ではないのである。

然し之等の事は、敢て特別に、作曲教授の爲のみにやらねばならない事では決して無い。即ち假りに作曲教授をやらなくとも、音樂教育としては是非共やらねばならない事なのだから、たゞ同一の仕事に別に又、作曲の立場からして責任を持たしておくだけのことであつて、仕事を二重にせねばならないのではないのだ。故に、後程作曲をやらそうと思ふ教授者は、層一層注意して之等の事を徹底させておけばそれでよいのだ。(勿論學年相當でよい)之等の事の徹底曖昧である事を願はず作曲教授に

取掛ると頗る困難であるのみならず、其効果も疑はしいといふのである。別に説明しなければならぬ事とも思はぬけれ共、簡単に之等の各々につき私の考へをつけ加へておかう。

(1)音階音程は確實であるのみならず、それに自由になつて居なければならぬ。旋律の流れ否感情の流れは、直に確實な音程を作つて、大した努力もなしに階名によつて、確にそして自由に又自然と頭に浮んで來る位ひにならねばならぬ。(勿論簡易なる程度、學年相當の程度に於て)感情は流れても之が旋律として階名で換言出来るやうになれなくては、とても譜にまて作り上げる事は困難である。

(2)拍子・タイム或はリズムの觀念の練習——(知るだけでなくて兒童のものとなり切つた)が入要である。普通の歌曲が拍子・タイム・リズム正しく練習出來て居れば、特別にそれのみの練習をしなくとも大抵は良いと思ふけれ共——(自然と感じの上から習慣づけられて居るから)——よく作曲させて見ると、タイムの無茶苦茶や拍子の

まぜこぜが出来、而もそれで平然としてゐる兒童があるが、之は全く其兒童に之等の音樂的陶冶が出来てゐないからであらうと思ふ。正しく練習したものならば、自然と自分の感じだけでもつて十分に、正しく行く筈である。

(3)聽音練習。

聽いた旋律を殆ど反射的に階名唱で云へる位ひでない困る。口授によつた教材の歌曲等を階名唱で云はせて見るのもよい。短いより長いのを、易より難のを漸次程度を高めて。

(4)記譜練習。

案寫の練習等が最も有効だと思ふ。之も漸進的に。

(5)感ずる事の練習。

感じ得ない者の作曲は結局娛樂にすぎない。娛樂遊戲の爲のみならず必要もないだらう。自己の感情を表現する處に創作があるのである。故に表現する自己即自己の

感じがなくては駄目である。

然し普通は誰でも多少なりと感じ得られる。朝日を見て愉快・新鮮・爽かさを感じ、軍人を見て勇ましさを、又蝶を見花を見て愛らしさ・美しさ・優しさを感じないものはまづ無からう。然し之は教育する事によつて進歩し又確實となる。殊に心を移す態度自己を虚にする態度の練習等は一層有効だと思ふ。

私は嘗て「君等が活動寫真を見に行つた時どうだつたか、チャップリンが寫つた時何を思つてゐたか、隣の友人の顔を見たか、口をあいて目を見張つて我を忘れて映畫に氣をとられてゐる様子を知れりや」等の話しから、我を忘れる事即自分を虚にする事を説明し、そんな心持になつて色々の物を見る事の必要を述べ——(美的直観)其練習をさしては反省させて、本當に其瞬間我を忘れてゐたかどうかを考へさせ、練習させた事があつた。そして少くもさういふ態度のある事及必要なる事を知らして、相當効果があつたと信じてゐる。

そして直観をする事が即感ずる事の練習であつて、無理に理屈からして悲しいと感ずと答へしめたり、面白い筈だから面白いと答へよ、といふやうな事を云ふのではない。自然と湧いて起つた感じてなければならぬ。だから感ずる事の練習は特別にやつてもよい。勿論他の教科でも必要がある。

以上の事が相當出来る様になつてから作曲に入ると頗る樂だと思ふ。

B、共作的教授

色々と多分の指導補導暗示を加へながら、殆ど共同作曲的に練習するのである。分ちて二とす。

(1)は旋律による練習。

(2)は歌詞による練習。

である。

(1)の旋律による練習は、A項豫備に近い練習であるが、一小節位ひのモチーフ(動

機——出始め。旋律の起り始め)を與へて、其れに續く適當なる旋律を個人的に或は共同的に想起せしめ、批評指導を加へて少しはまとまつた何等か意味のあるものとさす練習である。そしてそれを記譜させれば記譜力の練習にもなる。之だけでも随分個性が表れて面白いものである。漸次程度の高いモチーフを與へ、又長い旋律を作らせるのである。

例へば、

1—23 ……と與へて次は自由に、
 1—23 5.6 5 5 | 3.3 2 2 | 1—0 〓 とか
 1—23 2.2 5 6 | 5.5 2 3 | 1—0 〓 とか作らせる。

然し之は殆ど形式樂(器樂)に近い練習であつて、唱歌曲作曲にとつては間接的の効より無いであらう。

されど之でも或感情個性各自己の表れてゐる事に注意せしめねばならない。ともすると娛樂遊戲になる。それでも自己は表れるであらうが、創作といふものはもつと眞剣味のある筈のものである。氣に満たない點はどしどし訂正させ がよい。然し他人の本當の個性は尊重すべきである。

(2)の歌詞による練習——之は全く唱歌作曲の練習である。たゞ單獨自由にやるのではなくて、共作的にやる練習である。

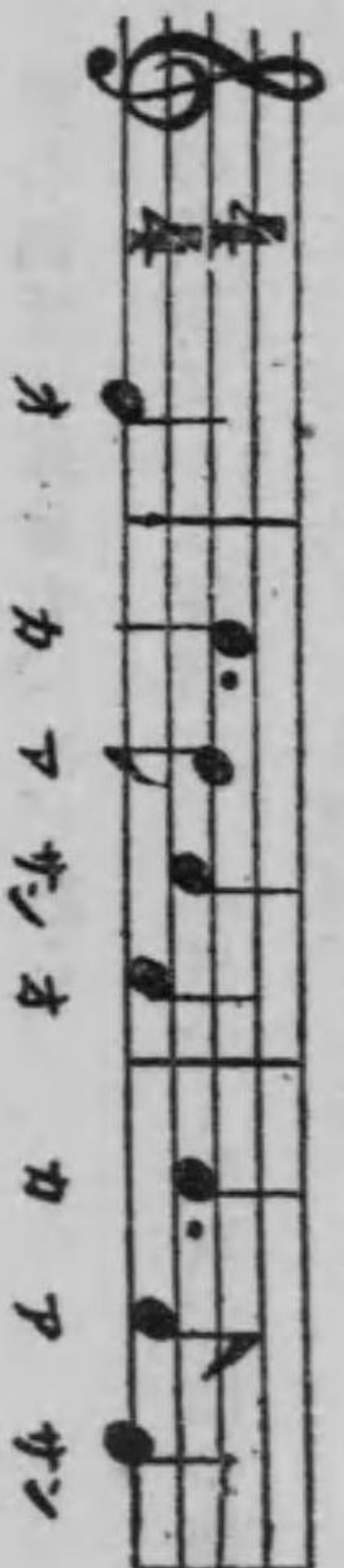
提出する歌詞は初は短くて平易で音樂化され易いのがよいと思ふ。それより漸次程度を高めるべきである。そうでないと全くまとまり難いものである。尙方法は共同的個人的でやる。私の最近やつた例二三を擧げておかう。



は淋しく悲しげに



は訴ふるが如く



は可愛ゆく甘ゆるが如く



は快活に樂しげに聞へる。

「かねがなる」といふのを唱へて見るに、



は淋しくて巡禮の鐘の音の如く



は忙しげで火事の時のやう

更に「波の音」をして見ると、



は餘程激しい波に思はれ



は長閑なうねりくした波

かやうにして一語位ひが出来れば、更に一句位ひをやらし、漸次進みて一つの歌・詩をまとめてつかむ事の練習をやらす。そして出来たら記譜させて見て訂正推敲させ批判する。かくて歌詞に作曲する事の初步練習をすればよいのである。或はもつと始めはたゞお母さんとうたつて見よ、ホーホケキョとうたつて見よ、と云つて勝手に或氣持でうたつたのを色々説明してやつてもよい。又其氣分情緒を説話でしてやつて、そんな氣分でお母さんとうたつて見よといふやうにしてもよい。或時には又始めを一寸云つてやる位ひの事もある。

とにかく、かやうにして易より難に進むのであるが、之も合同で協力してやつて見るも練習としてはよいし、個人々々にやらして見るのもよい。即ち多分に教師の指導が始めから終りの方まで混入する故に共作法としておいた。

C、自由作曲

之には全くの自由のと歌詞だけ課題のとある。何れにしても全く自力で作力して來

る。全く自由の方になれば作歌作曲共にする時もある。之を批正鑑賞して一層作曲力の陶冶を計ればよいのである。特によいのは模範的として全生に歌はせるのもよい。取扱法は綴方の自由創作とよく似てゐる。

かくの如くすれば、作曲教授は決して不可能にあらず。されど又考へ様によれば随分困難且危険性があると云つてもよく、先づ教師自身の力の反省を先にすべきだと思ふ。

私の作曲をやらせた兒童の作品四つを照介して見ると、

鉛筆 尋五尾崎作歌作

さきの ほそい えんぴつ さん
 あなたの からだは まつくる だ
 きものは みどりの うす-い い ろ
 あしなし てな-しの えんぴつ さん

初雪 尋五田川作歌作曲

ちらちら はつゆき ふってき た
 まへかけ ひらげて うけませ う

うさぎ 尋五寺田作歌作曲

ウーチャン ウーチャン ウサギサ ン
 オミミノ ナマガイ オメノ マルイ
 ウーチャン ウーチャン ウサ-ギサ ン

冬の草木 尋五森尾作歌作曲

ゲンダン サムク ナリマシタ
 ノヤマノ クサキモ ションボリト
 ハラオト サレテ ナイテキル

第七章 鑑賞と其取扱ひ

一、鑑賞の意義

私は前章創作過程の心理的分解の處によつて、鑑賞はその反行的過程を取る事を述べたから大體は明瞭だと思ふ。故に其實際に於ても決して皮相的な事にしたくないのは云ふまでもない。即ち聴かしただけで鑑賞させたとは一概に云へないのと、又これとつまらない事を批評させたとして鑑賞させたのではない。外形的には餘り變りがなくとも、眞に心の中から其氣分靈、生命に酔つてゐる態度でなければ、鑑賞の極致——享樂まで行つてゐるのではない。批評・批判は教育的手段として價値はあらうし、又鑑賞の結果は批評・批判になるかも知れない。けれ共單純な兒童の批評・批判等は全く眞の鑑賞享樂等を別にしての事があるのを注意せなければならぬ。終始鵜の目鷹の目であら探しの態度の者には、享樂の安息より來る幸福満足は恵まれない。鑑賞には先

づ同情と愛とがなければならぬ。

そして其同情と愛との結果としての批評ならば、眞に尊い批評であり得る。先づ兒童を同情と愛とを以て酔ふまでの態度に導き、然して後批評さすならば其同情の念、愛の涙の結晶としての批評をさすやうな鑑賞教育でなければならぬ。蓄音機をきかす事が勿論直に鑑賞ではない。學友の唱ふのを聽かすのもこの意味に於て直に鑑賞とは云へない。教育のある者も——従つてせらるるものも、又人の教授を見る者も皮相的な事で、此重大深刻な鑑賞を其日暮しにして終つてしまひたくないと思ふ。

私の言ふ鑑賞はかゝる意味の鑑賞であるのである。

二、藝術鑑賞享樂の價値

藝術鑑賞享樂の部面が、如何に藝術にとつて又藝術教育にとつて有意義であるかは鑑賞のみを以て藝術教育を果さんとさへいふ方法論者の存する事を以てしても明白であらうと思ふ。鑑賞をはなれた藝術は普通人生にとつて無意味であらうし、従つて多

くの天才的作家の残した藝術品は、鑑賞の爲に存すると云つてよいであらうと思ふ。實に鑑賞は藝術にとつて従つて藝術教育に於て、創作と共にその重要な二大部分である。

次にかく藝術鑑賞享樂は必要であると云ふが、何故に必要であり如何なる價值を持つか極めてその大略を述べておかう。

ミュンステルベルヒは其著「藝術教育の原理」に於て、安息を以て藝術——藝術教育の本質的使命と考へてゐる。氏は「アメリカ國民は唯ひた働きに働くことのみを教へられて安息する事を教へられないで來たが、安息する事は或意味に於て仕事其物と同じ權威を持つものであり、又仕事その物に新しい價値を附與するものである。然して唯一の理想的な安息は嘗て宗教によつて行はれたが、現世に於ては唯美のみである。そして之を以て藝術教育の本當の使命とすべきだ」と言ひ、更に其使命は教會の持つ使命とは實に全く違つて——如何なる家庭にも、將又如何なる生活にも理想的安息を與へ

る事である。即ち理想の中に安息する術を教へる事であるといひ、又其安息は其日の奮闘を超越した完全なる満足であると云つてゐる。之は勿論米國のつもりで言つてゐる事であるが、果して我國に必要な事であらうか。殊に現代の日本に。即ち吾々は闘ひと共に又闘の爲に満足や安息や幸福を見出し與へられなければならない。藝術鑑賞の安息は此點に於て最も重要である。實に藝術教育の安息は一面實生活より見て其避難所でありオアシスでなければならない。

更に藝術は真相の表現であり、十全の理想の表現である事よりして、其藝術的鑑賞は即真相を知る事であり、十全に高揚されたる魂・生命——神を見る事であり、従つて吾々鑑賞者の魂を十全に導く事であり淨化する事である。又不完全にして貧弱極る吾々實際生活の補充をなすと共に、其暖かさと潤ひとを與へるものである事は敢て言ふに及ばない。かくして吾々物質文明的教育の重視と相共に、精神的——藝術——藝術鑑賞の教育を重視しなければならないのである。

三、鑑賞と説明

鑑賞に説明は必要か無用かの問題には異論がある。ヘルマンオプスト氏は直觀の存する時に説明は不用であり寧ろ有害であると。即ち藝術と説明意志とは深酷極る反對をなしてゐるから、説明は生徒をして總ての鑑賞享樂に對して嘔吐を催さしめると極論し、又アルツールポームス氏は學校教育なるものは、凡ゆるものを噛み砕く様な概念的取扱ひを以て、總て生々たるもの並に想像や藝術等を殺すから、凡ての文學や詩歌を學校教育の圈内から遠ざけようと呼んでゐる。

然し適當なる説明あつてこそ、よりよく享樂し得る藝術品の世に存在する事及び方法の間違は矯正し得るものであつて、何もそれが爲に藝術其物まで學校教育より遠ざける必要はない。といふ事のわかつてゐる吾々は、勿論之は一の極端論としか受取れない。けれ共其の中に一面の眞——は含まつてゐる事を注意しなければならぬと思ふ。即ち殊に我國の未だ多くの教育者の如く、藝術享樂的修養の不足なる部分を知的

説明の親切さを以て補つて行かうとし、或はそれに止つて足れりとしてゐる教授法と取る現狀に於ては、特に前二者の言ふ頂門の一針でなければならぬと思ふ。

然し問題は解決したのではない。即ち説明の有害なる事もあれば有効な事もあるのだ。故に有用にして無害有効なる説明の程度なるものを吾々は考へて居らなければならぬのであるが、私は此處に於てレーマンの言を引いて結論とする。彼曰く「藝術品を一つの全體として理解し把握し、感得するに足るだけの説明を要求す」と。私も之を信ずる事が出来る。そしてかゝる程度の説明こそ有用にして有効なる説明であるから、之を程度としての説明によつて鑑賞享樂をして一層深刻ならしめ、教育の効果を大にしなければならぬと思ふ。

(四) 鑑賞教育の方法

愈々其方法を述べて見る事になつた。けれ共始からして其淺薄に終る事の心配がある。即ち到底鑑賞といふやうな事の、其細其精は述べ得られない性質のものであるか

ら。讀者はそれを許して下さらねばならない。

(A)鑑賞教育の用途

出來得る限り色々の場合を鑑賞教育に利用する教師は上手なる教師であらうが、其の重なる場合を擧げて見ると次の如くなるであらう。

1. 教師の演奏。
2. 兒童相互の演奏。
3. 蓄音機の利用。
4. 音樂會その他。
5. 自己の演奏。

音樂教育に當る教師は、自分の獨唱獨奏等を示範といふ様な意味に於ても、上手でなくとも少くも正しく演奏して聽かす事によつて、兒童の藝術的理想の向上に資し又鑑賞せしめたい。他の子供——上手な子或は上級の子、時には低學年の子——の獨唱

を聽かすのは頗る容易であつて有効である。けれ共此場合注意を要するのは、つまらない競争心やあら探しや、今度は自分がやつたり或はやりたくないと言ふ事の爲に肝要な鑑賞享樂 無意味にする事の多い事である。愛と同情によつて、平和な心で専心聽き惚れるといふやうな、そして所謂假象界を逍遙するといふやうな態度であらせたい。

3の蓄音機の利用は頗る便宜な方法である。勿論出來得る限り上等の機械とレコードによつて、出來るだけ藝術的である事に注意したいが、(特に聲樂に注意)自分がよくやれない教師も之を使へば樂に聽かせるし、又到底教室や田舎では聽き得られない大規模高等なものも容易にきかせる事が出來るし、又巨匠の藝術にも酔はせてやる事が出來るのである。

音樂會等は勿論利用すべきであるが、其他軍樂隊等のやうな團隊的演奏や、個人的名人等を招いたりして聽かせる事は最も有効である。私の學校では嘗て駒田好洋氏の

オーケストラ部を招いて聴かした事もあつた。然し之等の時は平常からの聴く態度の養成に注意しておかないと、折角のそれを無駄にしてしまふものである。

5の自己の演奏とは、自分の獨唱——微吟唱、又は獨り樂器を奏する事によつて其歌曲音樂を享樂させる事である。最も意義のある深刻な鑑賞だと思ふ。

(この意味に於て自分の演奏する事は頗る又創作的ともなるであらう)

(B) 鑑賞さす種類

出来る限り其種類を多様に廣く鑑賞さす必要がある。一部份に偏する事は弊害を伴ふ。其樂器の種類に於て、性質に於て、教師の好き嫌ひによる事は勿論害が多い。兒童の好き嫌ひも稍之と同様である。嫌ひといふものゝ中にも、補導の方法によつては美しい所やよい處を見つけ出させる事が出来るものである。然し勿論個性を妨げたりする非教育的である事はいけない。

(C) 鑑賞と程度

作者と鑑賞者とに於て生命の内容の寸法に差がある。時には所謂高尚過ぎてわからないといふ事になつて鑑賞は無意味になる。だから年齢學年生の内容相當のものである事が原則である。けれ共絶対に其高尚なものが不可解に終るのではない。即ち適當なる方法によつては漸次それに近づき、そして遂にそれを——前にはわからなかつた曲を——享樂し得るに至るものである。勿論大人にならねばわからない事もある。強いてそれを早めやうと努力する必要はない。子供相應のものよりして漸次其發達と共に程度を高めて行けばよい。けれど之は重に内容樂——歌詞あるもの——の事であつて、器樂になると大抵誰でも自分相當に其中に自己を見つけて、其美に酔ふ事が出来る。完全な鑑賞は望まれないが、全然鑑賞出来ないのではない。尋常一年生の子供にもマーチ等の明瞭適確なリズムや、美しいメロデー等は感ずる事が出来る。淺い鑑賞一部分の鑑賞でもよい。私は小さい時から鑑賞享樂に慣れさせる事を必要だと思ふ。勿論それかとしてクラシクソナタ等を、初から小さい子に聴かそうといふやうな愚

な真似をしようといふのではないけれど、器樂ならば相當誰でも鑑賞し得るといふのである。

小さい子供が勿論深くわからない乍らにも、リズムにひかれて手足を踊らし、美しいメロデーを我を忘れて其悲喜快鬱の自然な表情を面に表して聴きとれる様子を私は無上に尊いものだと思つてゐる。高學年になれば相當の感じ等を述べ立て發表さす事もあるが、發表さす事が直に鑑賞——殊に享樂でない事を十分に考へて居りたい。感想の強要はともすると、享樂を享樂で無くしてしまふものである事は、批評と鑑賞の場合と同一である。

嚴密にいへば到底言葉に出し得ないものであらう。説明し得る限りはまだ藝術でない。言葉や文字で説明し得ない處に本當の藝術の天地が存するのだ。

(D) 鑑賞と態度

態度については大體前の事でわかる。けれ共更に私の要求してゐる態度の條項を列

挙して見ると次の如くなる。

1. 軽く目をつぶつた方がよい。
2. 樂な姿勢がよい。
3. 意識を全く其歌曲音調にのみ遷して他の事を考へないやうにする。
4. 自然に出る表情は尊い。

○ 感想批評等は強ひないで、言はずならば後で氣附いた事のある者に言はずだけ位ひにする。

又教師自身としては、

1. 必要にして有効なだけの説明を與へる。
2. 妨げとなるやうな舉動を慎み自分も鑑賞する。
然し全體の兒童の様子にも氣をつけねばならない。
3. 自分の感想批評等を自分のものとして發表して、一は鑑賞態度の暗示とし又成

積向上の資料とする。

4. も一度聴きたいと云ふやうな所は繰返してやる。
5. 演奏前に於て感想批評等を課題しておくことは原則としてやらない方がよい
大體こんな積りで鑑賞させてゐるが、子供等は大層之等の事を喜んでやつてゐる。

(E) 鑑賞材料

唱歌曲童謡等は別に變つたものでなければならぬ事はない。平常教へてゐるものの中からも結構である。よく珍らしいのをやつて珍らしがつて喜んで居るのを見て鑑賞成功と思つてゐる者もあるが、之等は或場合鑑賞の反對の結果になつてゐるものである。本當の鑑賞は聴けば聴く程味へば味ふ程、知れば知る程深くなるものでなければならぬ。だから始めての時よりも二度目三度目になつた方がよいわけである。器樂等は重にレコードに寄るより仕方ない。そう何でも自由に然も上手に弾ける教師は少い。レコードには相當よいがある。いづれ蓄音機の處で云ふ事にするが、

う考へて來ると別に材料に困る事はない筈である。

第八章 音樂常識教育と其取扱ひ

吾人既に再三再四小學校本科教育の、唯々唱へしめる事のみを以て終始するの不可なるを論じ、樂器に鑑賞に又作曲に、各方面の教育の必要なるを論じ、方法を説明したが、本章に於ては殘されたる一方面の即ち音樂常識教育と其取扱ひについて、吾人の信ずる所を述べやうと思ふ。

知るは愛のもとである。理解あつてこそ本當の愛が生ずる。自然を知つて本當に自然を愛するの念の愈々深まるが如く、音樂を知つてこそ始めて本當に音樂を愛する念が起る。目的の所に於て論じた如く、音樂教育の究極の目的は知らず事に存するのでは勿論ないが、究極の目的をしてよりよく達せしめる爲にはそれが必要なのである。愛してこそ愛する者の感化陶冶を受け得るものである事は、敬愛せらるゝ教師にして始めて兒童に人格的感化薰陶を及し得るの例に徴しても明かであらう。かくして知ら

す事の一目的は愛のため、或は趣味の爲延いては音樂藝術教育究極目的の爲に存するのであるが、一面又知らず事の目的は知る事自身にも確かに存在する。一文化國民として一等國民としての將來及現在の我國民が、シンホニーの意味、オペラの何物たるやをすら解し得ずして果して如何。チエロの名手來ると新聞紙上に見出したりと雖も、チエロの如何なるものかも知らず、ハイフェッツ我國を訪れたるといふも、ハイフェッツとはどんな人であるかを知らず、或は産土の神の前に奏する神樂の如何すらわからずしてどうであらう。それでこそ音樂會に世界無比の高價な入場料を拂つておき乍ら、特等席で欠伸を嚙み殺してゐる國民が出来るのである。私はかくして音樂知的常識教材の必要を絶叫するものである。

扨愈々常識教材及其取扱ひにつき説明する順序となつて來たが、先づ教材について考へて見ても、之は今の所随分漠然たるものであつて、其取材の範圍數量等決して定説もなく、又取扱ひ方に於ても其實際案に乏しく、参考とする何物も無くて困つて

まふのであるが、私は私一個の考へから取材及び其取扱方共に、私の適當と思ふ物を次に一覽として掲げて見て、諸先輩並に各位の御示教を仰がうと思ふのである。

音楽常識教材一覽

項目	事項	時間	取扱
音 樂 史	原始的音楽	〇、五時	音楽の發生につきて、原始人の音楽につきて
	日本音楽史	一時	唐樂傳來以前及び以後の日本樂の様子 古典保存會のレコードを用ふれば殆ど定全なり
西 洋 樂 史	平安朝	一時	琵琶、謠曲等の起つた事、レコードはいくらでもある
	江戸時代樂	一時	義太夫節(大阪) 一中節(京都) 新内清元(江戸) 之もレコードは豊かなり教育的害なきものを選ぶこと
近世及現代	三呼		音楽の父としてのバッハ(附 バッハ以前殊にギリシヤ時代の音楽につきて) 月光の曲とベートーベン。レコードもある。 以下著名の音楽家につきて隨時隨所にてレコード、寫眞、逸話等を以て話したい。 近代及現代音楽家殊に最近來朝の世界的大家の吹込レコード等を利用して現代音楽の様子の大略。

器 樂	式樣奏演	同	別大二		素要の樂音					
			器	聲	メロデー	リズム	ハーモニー			
西洋樂器	重唱 合奏 獨奏	獨唱 合奏 獨奏	複音樂	單音樂	一〇分	五分	二〇分	一〇分	一〇分	メロデーの美しくそして明瞭なのを聴かせて リズムの簡單明瞭なものより漸次 美しき豊かなハーモニーのものと淋しく簡單な一番のもの 比較する 三要素の發達狀況等につき簡單にしらす。 但し兩方を同時に取扱つた方便なり 共に極く簡單にたゞ二大別する、事のみにて可。
日本樂器	重唱 合奏 獨奏	獨唱 合奏 獨奏	複音樂	單音樂	一〇分	五分	二〇分	一〇分	一〇分	メロデーの美しくそして明瞭なのを聴かせて リズムの簡單明瞭なものより漸次 美しき豊かなハーモニーのものと淋しく簡單な一番のもの 比較する 三要素の發達狀況等につき簡單にしらす。 但し兩方を同時に取扱つた方便なり 共に極く簡單にたゞ二大別する、事のみにて可。
西洋樂器	重唱 合奏 獨奏	獨唱 合奏 獨奏	複音樂	單音樂	一〇分	五分	二〇分	一〇分	一〇分	メロデーの美しくそして明瞭なのを聴かせて リズムの簡單明瞭なものより漸次 美しき豊かなハーモニーのものと淋しく簡單な一番のもの 比較する 三要素の發達狀況等につき簡單にしらす。 但し兩方を同時に取扱つた方便なり 共に極く簡單にたゞ二大別する、事のみにて可。

曲 樂 器				樂 絃 管		類 種 の 曲 學 聲	
マ ー チ	舞 踏 曲	舞 踏 曲	舞 踏 曲	シ ン ホ ー ニ タ	パ ン ド	オ ー ケ ス ト ラ	宗 教 樂 方 面
	其 他	メ ロ ウ ツ ト	ポ ル カ ツ	ソ ン ホ ー ニ タ	パ ン ド	オ ー ケ ス ト ラ	リ イ ド
一〇分	三〇分	一〇分	一〇分	三〇分	二〇分	三〇分	一 時
最も普通にして子供の親しみ易きものなり。レコードはいくらでもある。(君が代マーチ、軍艦マーチ等)	拍子の違ふ處を明ならしむ。著明簡單なるもの、演奏又はレコードによりて一度はまとめ比較せしむる要あり。	弘田氏の春が来たは最もわかりやすい。シヨツパンのが良い。レコードでも例示するとよい。	色々のものがあるが、何かで聴かした時を利用して簡単に説明すればよい。	綜合藝術であることの説明及歌劇場の様子等。グランドオペラとコミックについて例に一二の筋を話してやると喜ぶ。オペラ中の聲樂の位置や様子の大略例としてレコードを使用する。	序樂のことや伴奏のこと。序樂のよいレコードは澤山ある。	華麗優美な點 剛健質實な點 例示比較せしむること	蓄音機の利用により簡單にしらす 敢てまとめて取扱はなくとも隨所にやつてよい。

樂本日		劇 歌			類 種 の						
露	獨	佛 伊	器 樂	聲 樂	種 類	組 織	其 他	幻 想 曲	即 興 樂	變 奏 曲	標 題 樂
陰鬱強健な點	剛健質實な點 例示比較せしむること	華麗優美な點	序樂のことや伴奏のこと。序樂のよいレコードは澤山ある。	オペラ中の聲樂の位置や様子の大略例としてレコードを使用する。	グランドオペラとコミックについて例に一二の筋を話してやると喜ぶ。	綜合藝術であることの説明及歌劇場の様子等。	色々のものがあるが、何かで聴かした時を利用して簡単に説明すればよい。	レコードでも例示するとよい。	シヨツパンのが良い。	弘田氏の春が来たは最もわかりやすい。	之も子供に理解され易い然し音楽觀を邪道に導くな。時計屋の店、森の鍛冶屋等ピクチャーにあり。

西洋と		音 蓄			音 樂	
西洋樂の特徴	日本樂の特徴	國民樂の建設	沿革につき	利用につき	機械につき	レコードにつき
三〇分	三〇分	二〇分	二〇分	二〇分	二〇分	三〇分
レコード樂器等利用努めて實際的に	レコードにより聴きながら實際的に	エヂソン以來と今日の進歩	實用と娛樂趣味につき 大切なるは音樂的價値	使用法構造進歩價格等につき	構造使用法、保存法、種類等につき	學校の音樂會或は聴きに行く時等を利用して 學級音樂會を兒童をして主催せしむるもよし

◎教材は出來得る限り著名必要にして普通なものを選び選ぶだつもりであるが、加除共に勿論各位の御自由である。

◎取扱ひの方法は淺薄ながら、私の過去經驗によつて可能にして又適當なりと思つ

た方法によつたのである。けれども研究の上或は設備等準備の上、一改良を加へたいのは山々である。

◎一覽表としてまとめ、又時間等も記入すると大層鹿爪らしく、又一定の時まとめて或は系統を追つて大々的に教授するやうに見へるかも知れないが、實際教授としてはそう時間をまとめて之にばかり取る事も出來ないし、又さうする程の必要も餘り感じないので、多くは他の教授(唱歌作曲鑑賞等)と共に或は其間に挿んでちよいとやつてゐるのである。系統等も追ふ必要のある點もあれば、左程必要の無いのも多い。

故に時間等はそれだけ續けてやるといふ意味ばかりでなく、それに要する合計の時間といふ意味なのが多數である。

◎實際取扱の態度も無論教材に近いからと云つて、そう理屈よくやるのではない。出來得る限り興味本位に面白く、又實際中に常識的にやりたいと思つてゐる。

◎こんな教授には非入用なのは蓄音機とレコードである。蓄音機無しでは教授の効果は半減される。其他繪畫や寫眞や参考書や實物標本等も、出來得る限り多いのがよい。並にそれ等を帖つたり並べたりする設備も必要である。

◎レコード利用の部分は、私の手元にあるもの、中から選んで書いたのだから、つと良いのをもちの學校は、出來るだけ良いので聽かしてやつて頂きたい。随分此頃は教育レコード等の良いのが出來てゐるやうである。

第九章 學年別の顧慮

第一項 低學年の取扱ひ

低學年の教育は、決して低學年の故を以て安易なるものではない。却つて低學年幼年兒童の教育程困難なものであると私は思ふ。赤子の魂百まで——幼學年に於ての一寸の誤りの傷は大人になつて一尺一丈の傷になつて來る。幼年兒童教育は上級生を教育する者よりも、かゝる意味に於て一層の注意を要し手腕を要するものである。本科に於ても全くその通りで、時には却つて他の教科よりもより以上であるとも云へるのであつて、教育法の誤りは遂に其兒童の將來から音楽を奪つてしまふ様な結果になる事もある。教育が却つて非教育になり、生かす事が却つて殺す事にならうとも限らな

る。細心の注意、周到なる要意の必要なるものである事を呉々も注意しておきたい。私

は嘗て中學年生を受持つた時、むしろ今迄教育せずに(本科の)ほつておいてもらつてあつた方がよかつたと思つた事があつた。

ルソウの眞似ではないが、全く人の手によつて邪道に導かれてあつたのであるからだ。私はこんな意味からして低學年兒童の取扱ひに必要な諸點を、私の經驗と理論からして以下述べて見やうと思ふ。

A、入學當初の取扱ひ

新らしき環境を得て入學した兒童は、家庭と離れた淋しさや變つた友への羞恥や何かで、平素の腕白者もおとなしく、氣の小さい者等は小心翼翼々としてるのである。こんな時に乘じて教權濫用、然して兒童が恐るゝ教師の命を守り従順らしくしてゐると「教授らしい教授、教育が出来るやうになつた」と喜ぶ人もあるが、然し私は正反對の教育觀と其方法を探るものであつて、出來得る限りこの壓迫せられた心持ちを取り去つてやりたいのである。そして學校を楽しい所、先生をなつかしい人、音楽を好

きな教科としてやりたいのである。所謂學習訓練だとか基礎練習だとか言ふ様な事は其後の事である。否それが基礎であり訓練であらう。

即ち私は、既知唱歌を唱へさせたり良い音楽を聴かせたりして、先づこの壓迫せられた心持ちの除去に勉める。幼稚園へ行つてゐた子供等は、慣れてゐるし色々の歌もしつてゐるから、其等の歌を唱へさせて褒めてやればよいし、始めての子供等には童謠(俗謠¹⁾)等を歌はせればよい。何處の土地でも皆俗謠を持つてゐるであらうし、又子供等には子供等の童謠がある。

節廻し等は自然の儘でよい。敢て西洋樂器に調和しなかつたとて、かまはないであらう。

私が歌はしたのにはこんなのがある。

うちの赤ちゃん いつもうけた

三月 櫻の 咲ころに

それでお顔が さくらいろ。

つんばなとつて 實とつて

耳にまいて すつぽんぽん。

お月さんいくつ 十三七つ

そらまだ若い 襷買うてあげよか

帯買うてあげよか

たすきの中から やしちゃんがでて

誰にだかそ ○○ちゃんにだかそ。

いくらでもこんなのがあつた。子供達は喜んで歌ふ。先生も歌つてやると一層喜ぶ。又かうして先生の歌ふのを聴かしてやつてもよいし、樂器蓄音機等で美しい音樂や

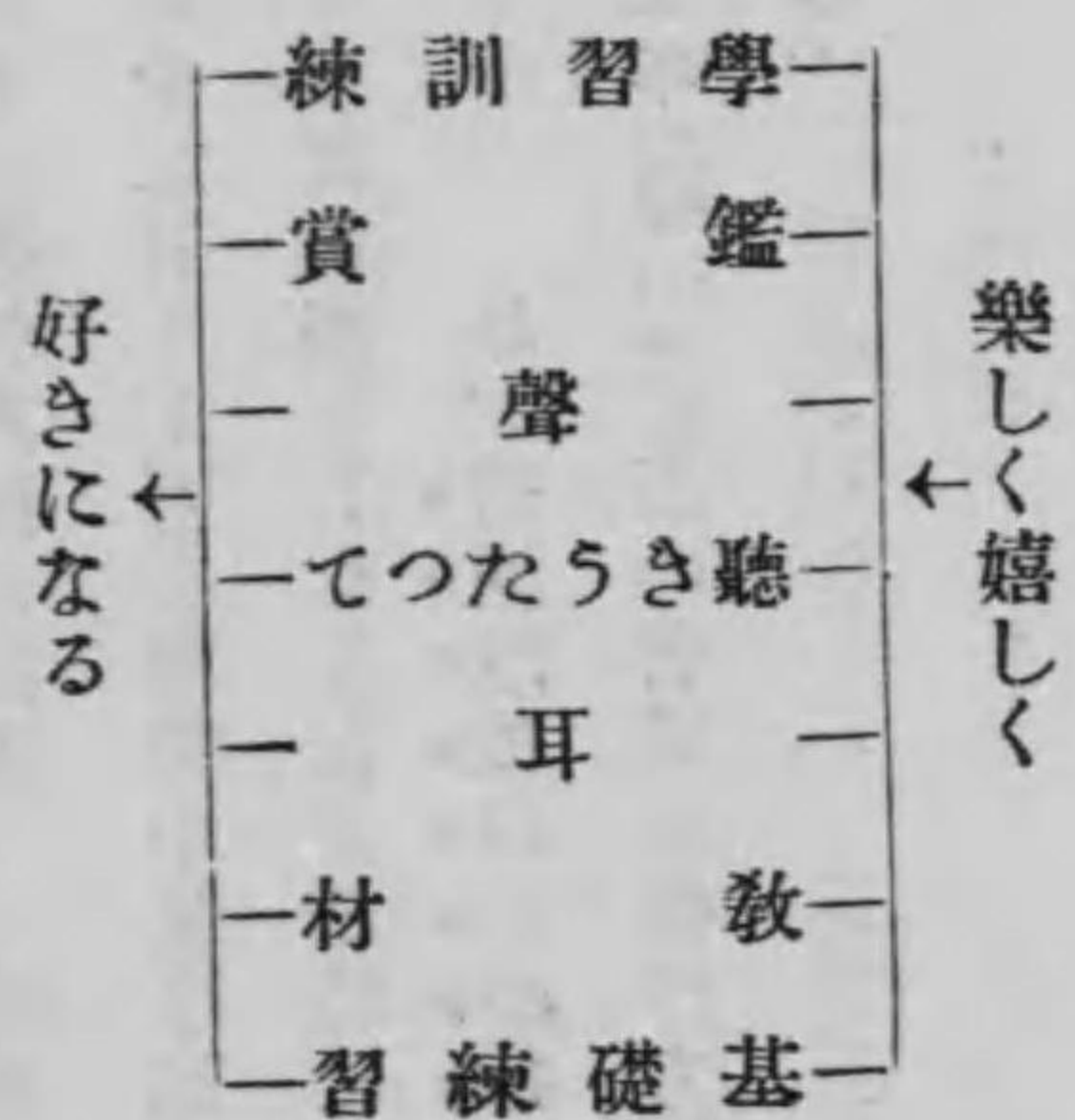
面白いのを聴かしてやつてもよい。珍らしいのと其美しさ面白さに、我を忘れて聴いている。

かうしてゐる中に、恥かしさや恐れは全く取除かれてしまふ。又明日學校へ行くのを楽しみにし唱歌の時間の來るのを待つやうになる。それが即ち入學當初の教授法であり學習訓練であり、又將來の基礎になる事だと思ふ。

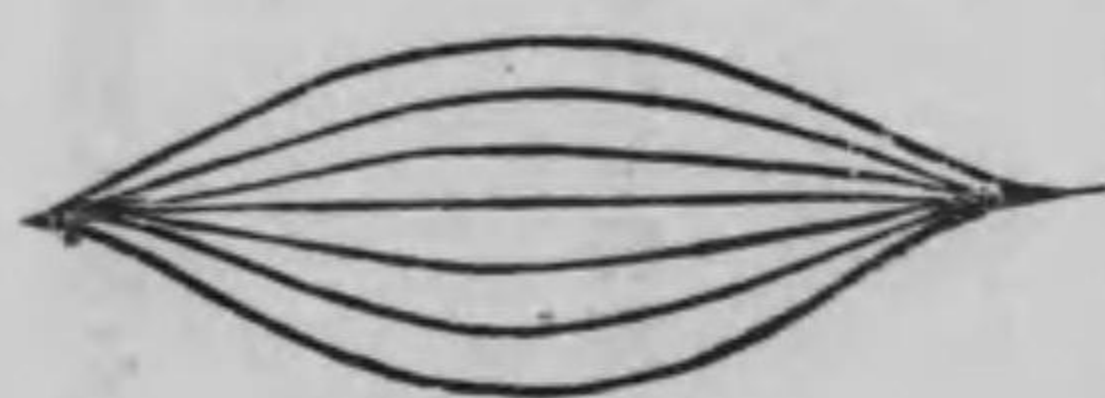
一月や二月——否一學期中位に殆んどかうしてゐて結構である。あせつて型にはまつたやうな教授をしようとする時に弊害が多いと思ふ。

B、普通取扱ひの心持

低學年(尋一二年)の普通取扱ひ方針を述べるべく、それを表解して見ると次のやうになる。



ハ調の絃振動



ねんねこうしたを聴く如く聴き、又童謡をうたふ如く楽しく謡つて、だん／＼唱歌音
 樂が好きになるのを以て、低學年取扱ひの骨子（ハ調のド相當）としたい。
 それで十分である。深い考もなくたゞ早く上手にしたい／＼と考へる時に、つい誤
 つてしまふ事が多い。口の開き方がどうの、音階がどうのとそれに許り氣が入つてゐ

る中に子供は臺なしになつてしまふ。殺されてしまふ。大人の技巧や理想を以て子供
 に向はず、先づ自然の技巧の儘で喜んで謡つてゐるのを根本としたい。

然らば自然の儘でほつておくのかと云へば、決してそうではないのであつて、圖解
 の示す如く其根本を中心として（絃の振動の如く）それを中心とする他の色々の事で指
 導教育する要があるのである。然し指導と云つてもそれは邪道に向はないやうに氣を
 つけてやるのが主であつて、上手にするといふのはたゞ兒童の自ら伸びんとする其の
 伸びる力にまかしておくと云つた方が私の心持にしつくりする。危険のない場所で滋
 養ある食物を適度に與へてさへおれば、子供は自分と自分の伸長性で生育して行く。
 無理に早く太らせやうと思つて、滋亞燐や肝油を與へても下痢するばかりである。教
 師の役は其危険を去除く事や滋養あるミルク等を適度に與へるばかりだ。これが即本
 當に太らせ伸ばさせる事なのである。結果として上手になつて来る。けれど直接上手
 然も技巧的上手等を目的とすべきでは無いのである。即ち消極的な方法が却つてよ

いのであつて、此頃のあまりに積極的なのは弊害が多いと思ふ。

扱危険を取除きミルクを與へるといふのは外でもない。表解の示す如く教材を適當に選び、(教材については第四章参照) 又よき音楽を與へて耳と聲の正しく發達する事を圖り、又は兒童らしき其等の時のお行儀や方法(學習訓練)を知らず事である。

教材は幼學年に適しなればならないのは勿論であるが、殊に音域等に於て誤ると忽ち聲を無茶にし、少くも悪い危険な發聲に導く事になり易いものである。樂にうたへる程度にしてやらなければならぬ。(尋一用の唱歌はそう編纂してあるからと云つて、必ずしもどの土地のどの一年生にも其儘で適當であるとは思はれない) 内容から言つても前掲「うちの赤ちゃん……」程度でなければ、心から喜んでうたふ事は出来ない。教材選擇は全くミルク選擇に等しく重大である。一步誤れば子供を損じてしまふ。即聲や耳や心を無茶にしてしまふ。鑑賞さす物の選擇も之に等しいものであるから、以て耳を訓練陶冶しなければならぬ。耳なき兒童の唱謠は手綱なき馬の如く無

茶である。尙耳の教育は謠ふ事の教育でもあるから重視せねばならない。又それ等を聴いたりうたつたりする時の、お行儀や方法は其間々に段々と訓練して行く事は何でもない。(基礎練習につきては別項参照) かくする事によつて楽しくきき、うたつて音楽が好きになる事を以て骨子とした低學年の本科教育は、段々と其振幅を増大して價值ある教育、fよりffの教育となる事が出來得るのである。けれど此際最も注意すべき事は、fよりffと段々強くなつても、それはやつぱりハ調のドであるといふ事である。即ちレやミになつてはならない。(レ||二年ミ||三年……として即程度が高くなるといふ事) 低學年は低學年(一年は一年、二年は二年)としての味のある、振幅の大きい、しつかりとした深い、ffの教育こそ低學年の理想とすべき取扱ひである。よく一年の子に二年や三年の、二年の子に三年や四年の程度の事をやつて一人喜んでゐる教授者を見る事があるが、甚だ誤つた事だと思ふ。一年の時は一年の事をやつてこそ二年となれ、遂には大人となれるのである。全く一足飛は危険である。然しそ

すると、然らば低學年の程度は如何といふ質問にあふであらうが、具體的に一定の程度を示す事は私には困難である。即ち子供によつても違ふし、教師によつても違ふかも知れないから。先づ無理をしない程度とでも云つておくより仕方がない。

尙學習訓練については、私は音に對する鋭敏と忠實とより來る訓練を以て本科獨特の學習訓練としたい。美しいメロデーが響いて耳を刺戟してゐても、一向平氣で騒いでゐたり、他の事に氣をとられてゐるやうなのは最も面白くない態度であると思ふ。

C、基礎練習

低學年(一・二年)に於ける基礎練習に關して如何なる考へが必要か。私は、私の考へを次に述べて見やうと思ふ。

私は普通言はれる基礎練習なるものは、不適切にして無用却つて有害だと思ふてゐる。勿論それは方法の上の事であつて、基礎練習的の考へが全然無用であるといふのでは決してないのであるが、幼年兒童と高學年生徒との基礎練習は全く形(方法)を變

へなければならぬといふ事は確かだと思ふ。

教師から眺めて如何に論理的必須の事であつても、之は直に子供の論理即ち心理に包攝された論理とはなつてゐない(第一章參照)のが普通だ。此處に幼學年への基礎練習の困難點と却つて有害になる理由が存する。如何に教師にとつて論理的に有用なもので、子供は全然無關心である事が多い。入用なんですよと入用であることそれ自身を知らしたり強いたりした所で、やはりまだ教師の論理であつて兒童の心理に包攝されたものとなつてゐない。叱つたり強いたり無理をすれば、子供は恐しいから何でもやれといふ事をやるけれ共、それは何等の尊い意義も價値もないのであつて、即論理を心理に包攝せしめる事に低學年基礎練習の方法と効果が生れて來るのである。(勿論高學年でもだが其形に大なる差がある)

擬然らば如何にしてこの論理(基礎練習)を心理に包攝せしめるか、そして低學年の基礎練習的任務を果すことが出来るか。

私は全く之の形をかへて遊戯化すること無意識化することが必要であると思ふ。到底普通の基礎練習其儘としての形では、幼児には食欲も起らなければ消化も出来ないものであつて、それを無理に喰べさせれば消化不良と胃病下痢を起すより外ないであらう。尙無理をすれば死んでしまふ。即ちあの無邪氣な平和の國のお使ひの様な子供達は其故郷である天國の音楽でも嫌ひになつてしまふ。かうなつては教育も何も無い。全く教師は地獄の閻魔の使、悪鬼のやうなものだ。兒童は其前に立つて震へてゐる。音楽教室を閻魔の廳の問責場のやうに感ずるであらう。

遊戯化すといふことは、兒童の興味に訴へて面白がつてゐる(他の事を)中に取入れられた教師の希望する基礎練習的事項について練習してしまふといふやうにする事である。けれ共又單に面白がらせるといふだけでなく、廣く言ふと他の目的を與へておいて、兒童に其目的を追はせておきながら、其中に於て基礎練習をさしてしまふといふ事である。一二例示すると、

發聲練習をするのに、

「カアーカアーカアア」と鳥の眞似をさしたり、「ハリーナガキレイユナリマンタ」雨が降ツテ參リマス」等と適宜うたはせてする如く。

又其等を一呼吸でうたふ事を競争させて、呼吸練習とするが如き事である。尙管理にも應用する事が出来る。例へば、

「コチラヲムイテウタヒマセウ」等。

尙又無意識の中に(之も或他の目的を追つてゐるのであるが)教師の希ふ基礎的の練習をしてしまふ事も出来る。

例へば教室へ入る時マーチでも奏いてやつて、それに足踏をあはさせて拍子觀念の練習するとか。

又習つてゐる歌曲の一部を示範説明練習することによつて發聲發音等の練習。

即ち「あゝ美しや日本の旗は」をうたはす時、アアで發聲發音練習もさしてしまふ等

である。

兒童は勿論其中に教師がア母音や發聲や拍子を練習させてゐるといふ事に關し、無意識であつて唯々日の丸の旗のうたを上手にうたはう、教室へほめられるやうに入らう等と、他の事を目的としてゐるのである。

音程の練習等も必ずしもドレミ等を云はねば出來ないのではない。普通の歌曲を最も音程を確かにうたふ如く練習させば、遂には不安定の音程に對し嫌憎、否定の習慣觀念を生じ、取立てた音程専門の練習をしなくとも十分なのである。即ち低學年時代に於ては歌曲の音程歴時等に關し正確なる教育をなす事が、やがて其等の不正不安定を嫌ふ耳や感じの陶冶となり、延いては正しくうたふ事の習慣能力が生ずるものであつて、學年年齢の進むと共に専門的音程音階練習等の出來るやうになるのである。

之が即ち低學年の音程練習であり、音階練習であり基礎練習であらねばならないと信ずる。

けれ共又他の方法で出來るといふ論者があるならば敢て反對する必要を感じない。方法は人にある。又方法は絶對的價値あるものでもない。要は適當なる方法によりよき結果目的に達し得ればよいのである。但し一年生の頃から音階や音程練習を其儘やらすことには反對したい。それ程にしなくともよい方法もあるし、効果もあげられ得るから。

D、「うた」の原始的考察より幼學年の取扱ひに及ぶ

普通うたと云へば唱歌聲樂の類、即ち歌詞を伴つた音樂を指してゐるのであるが、又一方には文學上の廣義の詩の類を指してゐる事もある。

然して、文學上のうた即ち詩は暫く別にしておいて、普通うたはれるうた即ち歌詞を伴ふ音樂——聲樂の成立を考へて見るに、それは作歌者(詩人)と作曲家(音樂家)との分業的作品であるのが普通である。

更にオペラとか表情を伴ふものには、振付として舞踊家の仕事を加はるのであつて

即ち三者の分業的合作物となつてゐる。

勿論極めて稀には同一の人で作歌作曲を兼ねてゐる人も無い事はないが、大部分はやはり合作的である。

然し之の遠く其原始的發生状態を考へて見ると、餘程其様子が今日のそれとは異つてゐるのである。

詩・音楽・舞踊と各其一部分宛につき考察し最後にまとめて見る。

(1) 詩の原始的考察

「詩とは美的目的を以て、美的効果を有する形式に於て表示されたる内界又は外界現象の言語上の表現である。」とエルンスト・グローゼは云つてゐる。

確に詩は言語上の表現である。文字は無くとも詩はあつた。我國の神代、文字は勿論無かつたが、神武天皇の久米の歌を始として諸神のお歌ひになつた。——詩は漸く舊事記古事記日本書紀の頃になつて文字によつて書留められ符號化されたに過ぎないではないか。

いではないか。

其詩の生れた時は勿論言語表現によつたのであり、又言語によつて次から次へと傳へうたはれたのであつたらう。現代にても未開の蠻人の間にはまた文字が無いが、それでも彼等は戦勝の喜び、豊年の喜び、或は出生・結婚・死亡等各慶弔毎に相應するうた——詩——言語表現の詩を稱するではないか。

古代——原始時代に於ける詩は全くかくの如く言語表現のみである。

漸く文化が進んで文字——言語の符號としての——が生じて始て符號化された詩——即ち文學上の詩か生じた。今日では詩といへば殆ど文學上のものに限るかのやうな気分がするが、然し嚴密に言へばそれは詩の符號であつて詩ではないと云へるかも知れないのである。吾々が文學としての詩を作るとしても、到底直に文字として作られるのではなくて——文字羅列の形式的興味として——一度は少くも頭に、胸に、或は口中に微吟——言語表現——して後それを符號化するのではないか。

即ち詩は其符號——文字——か？文字たる以前の言語表現ではないか？
要するに文學的詩と雖も、符號化す以前には符號化すべき或物があるのであつて、
其符號化さるべき或物は即ち前述原始時代の詩と同様と考へてよいのである。
詩の生れた後數百年にして符號化されるか、數分數秒にして符號化されるかの違ひ
だけである。

即ち廣義の詩、總べての詩は言語上の表現である——後で符號化されるか、されな
いかだけで——と云へる。

例へば「あゝ綺麗な蝶だな」と散文的にやれば詩にはならないが「蝶々々、奇
麗な蝶々」と美的目的を以て美的効果を有する美的形式をとつて表現された時に——
言語で——立派な詩たり得るではないか。

之で原始的詩——否詩は言語表現であるといふ事はわかつたが、次に考へて見なけ
ればならないのは、その言語は美的目的を以て美的効果を有する美的形式をとつて表

現されなければならないといふ事である。換言すれば言語の從的反覆——リズムミカル
或は抑揚變化等である。

扱このリズムミカル及び抑揚等は、音樂といふ事に頗る密接なる關係を持つてゐるも
のであるから、次に音樂の原始的考察に入らう。

(2) 原始的音樂

原始的音樂はリズムを第一としたと云ふ事は確である。原始人のうた等を（又は伴
奏的なハヤシ）見ても、ハーモニーよりもメロデーよりもリズムが最も中心をなし、否
リズムだけである位であり、進化と共にメロデー、ハーモニーが漸く重きをなして來
るやうである。即ちリズムが音樂の最大要素であり生命であるとも云へるのである。
尙一層言葉以前に音ありき。然して又音以前にリズムありきとも考へられるのであつ
て、ハンフオンピエーロー（一九世紀音樂家）がヨハネ傳福音書中の「初に道あり」を
「初めにリズムあり」と訂正したとかいふのも、これを意味するものではないかと思は

れるが、此に到つてはリズムが第一であり、初めであつたといふ事が確實になる。従つてリズムミカルな音といふ事のみを以てもそれは音樂なりと云へるであらうと思ふ。例へば太鼓の調べ等は全くリズムのみの音といつていゝだらうが、之はやはり音樂の中に於ける事が出来る。

こゝに於て即ち前の詩とこの音樂との合一(外的)と云ふ事が明になつて来る。リズムミカルな言葉即ち音は、音樂でなくしてなんであらう。

即ち原始的詩人の詩は、それ自體に於て直に原始的音樂家の音樂といふ事になる。換言すれば、原始的詩人は同時に作曲家であり、原始的詩は詩的作物であると同時に音樂的作物であるといふ事になる。時には一層音樂的リズムミカルたらしめんがために言葉即ち詩は第二次的になつて、遂には言葉の意味さへも失はれる位になつてゐるのも多いではないか。

(3) 舞 踊

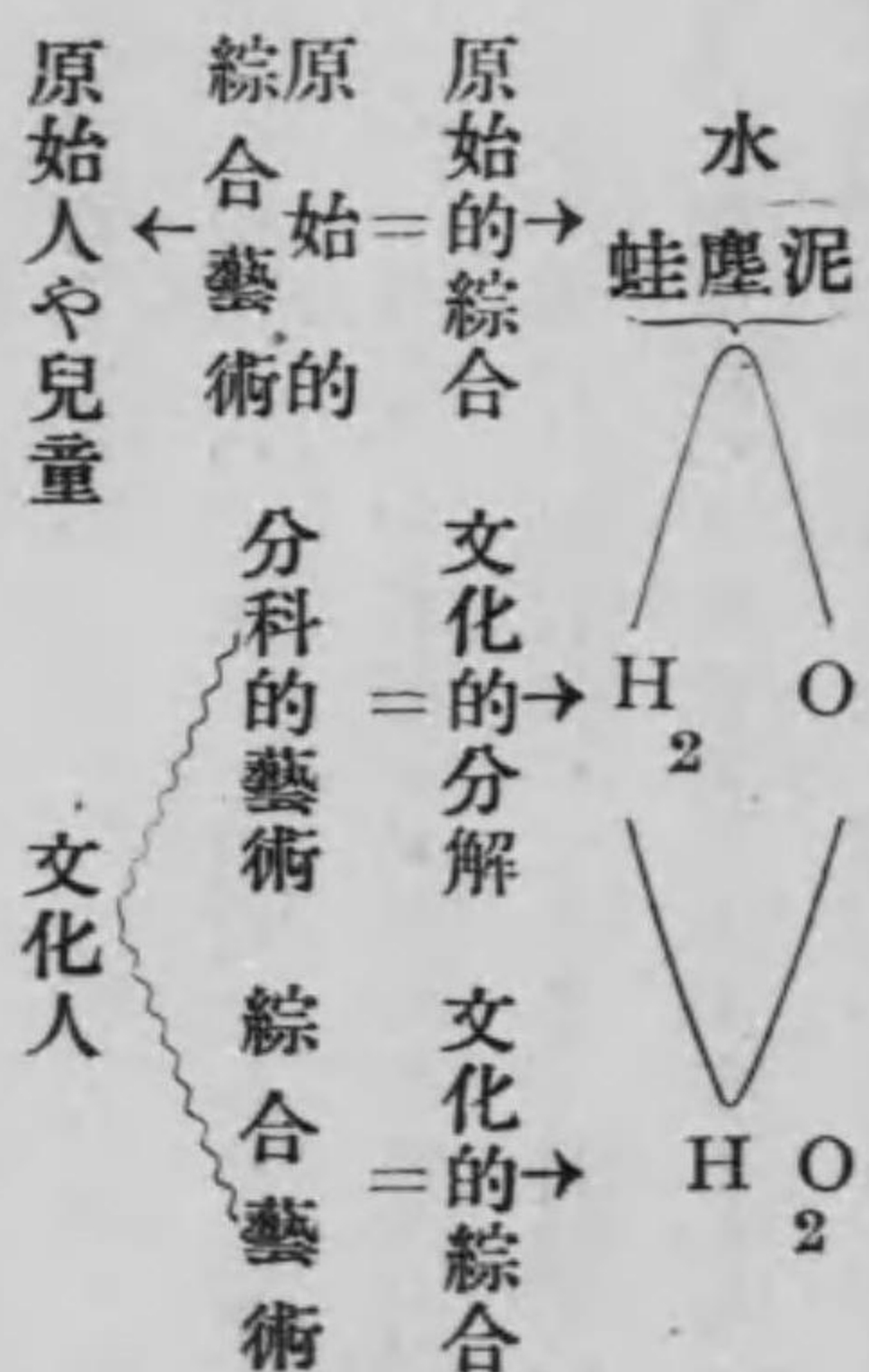
更に舞踊についてやはり原始的に考へて見たいのであるが、この原始的舞踊は、原始的美的感情の最も直接完全且詩言葉等以上に効果ある表現であると言へる。(今日の社交的體育的等いふダンスは、殆んど外的目的のためのダンスであつて、舞踊のための舞踊ではなくなり、舞踊それ自身よりすれば甚だ脱線せる舞踊、邪道の舞踊と考へる)然し音樂的伴奏を伴はない舞踊は、原始種族に於ても文化人の如く之を知らないさうである。こゝに於て、舞踊と音樂と、結合(外的)が來すのであるが、更に次のエーレンライヒの言が一層舞踊と音樂、更に詩とを結びつけるものであらうと思ふ。即ち彼曰く、「ボトクドー(南米ブラジル森林中の種屬)は、舞踊に伴はないでたゞ單に歌だけをうたふといふ事をしない。又其逆をもしない。故に彼等は同一言語によつてこの兩者を指稱する」と。更にエスキモーは、舞踊に音樂と多數の伴奏をするさうであるが、其場所を舞踊といはずして唱歌堂(音樂堂)といつてゐるさうである。

(4) 結 論

即ち原始民族の舞踊詩音樂は、かくの如く混一體として生れたのである。自然には結合してゐたのであつて、それが又彼等に自然だつたのだと云へる。従つてたゞ人爲的に抽象的に眺めた時のみ分離出來得るのである。更にこゝまで考察を進めて始めて私は幼學年兒童の教育について考がへて見るのであるが、模擬的舞踊は漸次衰退して遂にはたゞ兒童の世界にのみ存すといふ事、及兒童には原始人が永久に再生すると考へた時には、大人の便利のために又は大人の考へから不自然に之を引離すやうな教育を止めて、(唱歌の時間はうたへばよいのだ、何ぞ騒々しい踊らせるかといつて不動の姿勢を窮屈にとらしたり、或は唱歌の時間はダンスの時間にあらずとして、單にうたはすばかりだつたりして、兒童の生活學習をひからびさすとか、不自然ならすことを止めて)兒童の音樂唱歌のために踊らせるといふ事は自然にそふ事だと思ふ。故に表情舞踊は低學年にては體操科專屬のものではないのである。即ち體育のためのもの、みではない。音樂のために詩のために又それ自身のために、緊要なるものとなつて來

るのである。

而し、然らば之等三つは絶対に引離せないのか？事實として今日詩と音樂と舞踊の如くそれ／＼別々に獨立して存在せるは如何に、等といふ事が問題になつて來るであらうと思ふが、それは次に示す表によつて諒解する事が容易であらうと思ふ。



第二項 中學年の取扱ひ

私のいふ中學年は尋常科三・四年に相當する。低學年に於て、大體前章のやうな方針の下に教育して來た兒童を三・四年に於て如何に教育すべきかそれが章の主題である。兒童は此頃になつて來ると相當に心身共發達して來る。従つて自我にも目醒め性的にも稍相異を生じ、又自覺を持つてくる。好奇的な心も幼年生の空漠たる對象より漸次局部的又穿鑿研究的になつて來る。自他の區別よりして人の上手なとか悪いとかいふ事にも一層氣が付き稍批判等も出來るやうになる。又自分の拙劣を意識しては他の優る事を眞似しやうとしたり競争したりする事も、一層自我に根ざしたものと成つて來る。従つて又好き嫌ひといふ事も幼學年兒童の如く單純にして瞬間的でなくなる。時期から見ても高學年卒業期を後に控へた重要な時である。此の期を無爲に過してしまふと、卒業迄の教育の効力にも頗る影響する。殊に本譜教授をやらうとするには一層重大な時であると思ふ。

此時期を如何に本科に於ては教育すべきか其中重大なる事項につき述べて見やう。

A、唱・謠・的・方・面

伸びる事を自然にまかせて、たゞ邪道に陥るのを防ぐ位に考へてゐた幼學年取扱を一段進めて、稍伸ばすこと、上手に謠へる事の積極的指導を與へて、次に來る高學年の技巧的唱謠時代への準備とすべき時だと思ふ。

即ち此頃になると、人の上手下手や教師の示範等と共に、自分の拙い點或は出來難い所等がわかつて來るから、相當に表現の苦みを感じて來る。故に其時に參考となる示範や人の技巧を見せると、自分もそれを練習して其苦悶を統御しやうといふ氣分になり、そしてそれが出來た時には、統御し得た喜び表現し得る嬉しさを感ずるのである。故に相當に謠ひ方——發想やタイムや特種の表現や・發聲・發音・音域・音色等迄も——を示範指導して研究練習せしめてよい。即ち上手にといふ事を目的に持つて指導してもよい時になつてゐる。

自分の聲が出ないと云つて悄然としてゐる子もあつた。歌聲發聲の要領がわかつて喜んでゐる子も見た。

今日はレファの三度音程が出来るやうになつたと云つて、先生もつと今度からは困難なのをと勇んでゐる者もあつた。蹉いては苦悶し統御しては愉快を感じずる時だ。正しい發聲の要領や、普通の基礎的音程や強弱自由の發想、拍子歴時の正確自由等は指導を加へ、伸しに伸して上手に誦へるやうにまで教育しなければならぬ。

B、基礎練習

技巧的にも自覺の出來て來た、そして高學年期（仕上げの時期又更に高程度の練習期）を後に控へ、更に又本略譜教授に取掛る中學年期は最も基礎練習の必要な時である。又所謂基礎練習としての基礎練習をも仕方によつてはいくらでも出來得るのであるから、基礎練習としての形をとつたそれをやつてよい時である。以下どの程度にやるか略述して見やう。

○發聲練習

頭聲發聲の要領を會得せしめ、以て全聲域の正しく美しき發聲法を練習せしめる。然しこの場合決して強聲を強ふる事をやつてはならない。むしろ小さくて美しい聲を目的とすべきである。其方が誤らない。殊に男生等は粗暴亂暴な聲を出したがる時である。一層の注意を要する。

○發音練習

五母音の發音より練習すべきだ。そして漸次子音等に及してよい。又其應用的遊戲的練習も面白い。尙舌の廻らぬ子供や其他發聲發音上普通でない者の自覺を促し矯正に努力させるのも此期の終り頃の仕事である。

○音階練習

音階練習も此期の始め或は幼學年期の終り頃から始めて適當だと思ふ。（方法は第六章參照）然し發聲法或は音階のまだ不正確である中に高い處まで高い音で、或は強

い音で強ひる事は頗る有害である。そんな音階練習のために兒童を悪く導いてゐる教授者も少くない。細心の注意をして其時期を見定むべきである。即ち高音發聲（頭聲發聲）の出来ない内にドレミハ……ソラシ・ドと高い音を無理矢理に出させて、發聲法を悪く傾向づけてゐるのや、半音の出来ない内にどん／＼次をやらしゐるの等は少くない。其結果は實に恐るべしである。

○音程練習

譜教授をやる時それと兼ねてやるのが中々得策であるけれ共、始めから譜のむづかしさと音程のむづかしさと一時に背負す事は、兒童にとつて重過ぎるから暫くは模倣的に、それから階名指唱的に、そしてそれ等が出来るやうになつたのを本譜教授と復合して五指で或は五線上等でやるべきである。

勿論音程練習の程度は極易いの中から、最も漸進的に進まないに砂上樓閣式になつてしまふ。音程練習の最も陥り易いのはそれである。一つの音程例へばレミの二度音程なら、そのレミが全く自由強固確實になつてしまはねば、次へ遷つてははいけない。出来なかつたら例へ一學期間でもそこに踏止まるべきである。幾ら次へと進んでもそれは何の爲にもならないから。却つて不確實の儘進んで手廣くやつたのは其訂正に骨が折れるのみで何等効果がたいのである。

○聽音練習

遊戯化した聽音練習の簡單なものは尋一・二でもやるが、本當に聽音練習として其形をとつてやるのは、音階や樂な音程練習の相當出来てからでよい。

極簡單なメロディー等を聽かせて、階名で言はせて見るやうなのであるが、それは三年の中頃からでよい。

其他種々あるであらうが、大體こんな考へでやつて行けばよいと思ふ。

●●●
C、本譜教授

略譜にしても此頃から始めてよいが、本譜も大體三年の初め或は中頃から適當だと

思ふ。本譜教授法は別章に詳述してあるから簡単にするが、本譜教授にとつては此期は頗る重大な時である。本譜教授の基礎建設時代だと考へてゐる。この時期に本譜の簡單ではあるが、其根本となり基礎となる事と別章の程度に於てしつかりとやつておくと、五六年期に於て多少複雑になつてもよく出来ると思ふ。本譜は全く複雑な點に困難が存する。そして一時にこの複雑を理解させようとする處に無理があり失敗があるのだ。だから基礎的事だけを出来得る限り單純に、そして徹底的に取扱つておくと遂に複雑が複雑でなくなつてしまふものである。故に此時期の仕事の不徹底にしておくと、後の本譜教授が困難になる。尙此頃の本譜教授は知らなくともよく出来たらよいのである。知らなくともよいといふのは、名稱だとか理由だとかを暗記してゐなくともよいといふ事で、出来るとは事實としてその示す事が習慣でもよく、模倣からでもよしその示す通りに出来たらよいといふ事である。

理解的約束がなくては出来ないけれ共知るを主にする要がない。二分音符の名前を

知らなくとも二拍(四分音符を一拍として)に唱へられたらよいといふ事である。かういふ様な主義方針で、本譜の基礎を其魂に浸みこませてあげばよいのだ。さうするとそれ等の事は後になつてからは考へなくとも、自然にまるで先天的かの様に覺へこんでゐて、何時でも正しく出るといふ様になつてしまふ。かうなればもうそれに困難を感じない。だから次々と複雑な事を一步步々征服して行く事が出来るのだ。複雑極まる本譜はかくして長期に渡る教授によらねば中々困難である。

第三項 高學年の取扱ひ

尋常五・六學年及高等を以て高學年とし、其間に於ける大體の私の方針主眼點を述べて見やうと思ふ。随分長期の事であり決して五年と高二と同じではないけれど、大體此間の方針主眼は頗る似寄つたものであり、決して低學年と中學年中學年と高學年の間に見るやうな差異は無く、たゞ程度の深淺が其重なるものである位だから、まとめて高學年とした譯である。

此頃になれば他に比して頗る兒童の身體的發育發達と共に精神方面も進歩し、又小學校教育に於ても其終期となすものであつて、小學校ながらの教育完成期であり仕上げの頃であるから、其の末期の教育は又頗る其兒童等の將來に影響を與ふるものである。俗に云ふ上り場で船を割つては今迄の努力も効果も水泡に歸するのである。殊に本科の如く長期(全教育期間)に渡り系統的教育を必要とするものは、一層其系統を注意しその完成に努力しなければ、効果の上らないものである。以前立派な系統を追つて教育されて來た兒童等が、も少しといふ時になつて無茶苦茶にされてしまふ事も少くない。かゝる末期擔任者は一層の努力と注意を必要とする。

A、唱・謠・的・方・面

漸く技巧的にも上達しかけて來た兒童をして、一層統一ある技巧・自由の技巧・練熟せる技巧の持主、統御者たらしめ、尙又發達して來た精神的方面との協力によつて、愈々自覺ある藝術的唱謠に導きたいと思ふ。

低學年に於てはよく無自覺的、出鱈目的、又は模倣のみに終始した模倣的唱謠振が多いものであつて、其結果、非藝術的な唱謠振になる事もあるし、又無自覺無反省——自己の藝術的良心に對し——的唱謠になる事等は殆ど普通であるが、之で終つては満足されない。

即ち統御したる技巧を以て、統一的に個性的に——換言すると自覺あり反省ある藝術的の唱謠にまで進ましめねばならない。

そして兒童心身の發達と、以前の系統的教育の結果は確にこの教育を可能ならしめるものであると信ずる事が出来るし、又それだけの教育を可能ならしめ得る教師でなければ、少くも本科を受持つ資格なきもどかと思ふ。

一歌曲の練習過程が、機械的理解的より審美的練習に至る事の如く、全教育期の教育過程も大體同様の経過を要し、高學年期は即ち其の審美的態度の完成期であると思ふのである。

B、基礎練習

高學年殊に五六年時代は基礎中の基礎時代である。中學年の後を受けて其一般的基礎練習の仕上げ及一層程度高き基礎練習の練習期である。高等に於てはそれ等の習熟完成又必要なる新領域に其開拓を謀つて、普通音楽に要する技能の基礎となるものは大體練習し終へるのを以て理想としたい。

最早誤つた發聲法をまだやつてゐるやうな兒童は全くなくしたいし——と云つても勿論唱謠不能に近い異狀兒等は致し方なく、又大人の有するやうな力強き發聲等は決して理想としてゐるのではないが——普通唱歌曲に出る位ひの音程は、全く自分で正しく唱へられねばならない。又かゝる唱歌曲位ひなら全く視唱出来る位ひの讀譜力もつけたいし、簡單なるマーチ位ひの視奏力は高等等に於ては可能にしたいと思ふ。尙又音楽會等を聴きに行つても、大體は理解せられる位ひの常識も必要である。(第八章参照)

かくして即ち普通の唱歌曲・民謡・マーチ程度の音楽に對する諸能力及高級音楽に對する常識位ひの事は、この期に於て成し遂げたいものだと思ふ。

いつまでも俗歌しか歌へもせず、理解も出来ない青年を養成しては居られないのである。世界の文化は進んでゐる。我國も段々文化國の本當の仲間入が出来るやうにならねばならない。

C、本譜教授

本譜教授も完成出来ないのならば始からやらない方が餘程ましである。本譜でやらうと方針を定めてやり出した以上は、此の高學年期に於て其結びをつけてやらねばならない。完成を計つてやらねばならない。

然し本譜の完成——本當の意味に於ける完成といふと、頗る複雑であり困難であつて、到底小學校教育だけで出来る事ではないのであるから、次に小學校教育に於て可能にして必要なる程度の完成を述べておかう。

○尋常科に於ける完成の程度

1. 高音部譜表に於ける普通の諸調の普通の歌曲の視唱力、記譜力等。
2. 高音單音にての有鍵樂器視奏力位。

○高等科に於ての完成程度

1. 尋常科より一層程度高さもの。
2. 低音部譜表に於ける簡單なるもの、視唱力記譜力等。
3. 大譜表(高音低音兩部のあるもの)の簡單なるものに對する視奏力。

D、樂器練習

之は私の目的論より眺めて重要な一部分である。けれ共設備との問題であつて設備なき處では如何とも致し方がないが、將來は大に設備を整へて此方面の開拓に本科の教育は向けねばならないと信ずる。

そして最も手始めの設備としては、高等にのみオルガン・ピアノ等を與へるので我慢

しなければならぬが、出來得るならば五年位ひから練習させてやりたいと思つてゐる。勿論もつと早くからやらせても、その方が一層よいのだけれど、之は中々理想の事であつて、我國ではいつになつたら望める事か遠き將來の事であらうが、少くも今日は五年から樂器を與へる事位ひには、一日も早く努力しなければならぬと信ずる。

變聲期兒童に謠はしめずして、器樂練習をなさしめるのが適當だといふ論は大分あるやうであるが、それをもつと擴張して低學年から樂器を與へる事のまだ唱へられないのはどうした事か。——有害か……方法を考へ適度にやればよいだらう。無益か……決してそうではない。出來ないか……確に出來る。然らば如何私はまづ金のない事と法令の束縛と理想の無い事位ひに考へてゐるが、それならば是非——この理想に向つて進みたいと思ふ。

然して愈々五年位ひからやるとするとどうするか、大略の考へを述べて見やう。

少くもオルガンなりピアノなりを一級一臺宛は與へねばならない。より數多くより上等の品を與へる事は結構に違ひないけれ共、我國の現状としてはそう多くを望まれないからものと簡單でもよい。教師用樂器の古でもよし、ペビオルガン位ひでもよし、其等を與へて使用法をよく教へてやつてから、兒童交る交る練習させればよい。五年等では練習といふものよりも親します位ひの考へてよからう。本譜教授の進行と兒童心身の發達とにつれ漸次本當の練習になればよい。

多數兒童に一臺のペビオルガン位ひで、何が出來るといふ者もあるかも知れないが、私はそれでもよくそして無いよりは數等上だと思ふ。單に樂器に幼い頃より親んで趣味が生じ、大人になつてから家庭に一臺の古オルガンでも備へたいといふやうな心持が起るだけでも大なる効果である。そんな時代になつて來なければ本當に本科の發達が出來難いであらう。唱歌校門を出でずの聲はいゝ加減になくなつてもよい。否無くならずやうに努力だけでもするのが吾々の任務たと思ふ。たゞ徒らに校門を出で

ずくと歎じて居つたつて出るものではない。成金の贅澤品としての樂器は餘り尊いものでないけれど、かうして校門を出て社會に擴まつた音樂、樂器は頗る尊いものである。ブルジョアの音樂よりも一般階級の音樂こそ人生に價値あるものである。

扱話は横道に入つたが、五六年では單音で然も本譜で奏く事の練習をさせたい。技巧等はさうやる必要もないが、自分等の習ふ歌曲や作つた曲位ひを奏いて見る位ひの事は出來るやうにしてやりたいと思ふ。そして高等になつたら低音譜の理解と並行して大譜表の見方及び樂器(有鍵樂器)との關係を教へ、漸次練習せしめて簡單なマーチ位ひは視奏出來るやうにしてやりたい。方法によつてはこの位ひの理想を達するのは何でもないと思ふ。

私の學校の高等男生某が、先年の音樂會にクシコスポストをピアノで彈奏した事もあつた。高等の女生がマーチをオルガンで奏いた事もあつた。十分の指導も出來ず殆ど樂器をなぶらしてあつたゞけであつたが——勿論さう上手とは云へないが——それ

でもいつのまにかこんな奏けたのだから、少し熱心に指導する時間と熱心さへあれば、もつと／＼上達出来ると思つてゐるのである。私の義妹に今高等女學校三年の子があつて、樂器は漸く一年程前から勉強の暇々を少しづつする位ひであるが相當奏けるやうになつてゐる。バイエルの教則本を殆どあげてしまふ位ひだ。

幼年期の間はすべてが單純だから、さう澤山の時間や努力を要しなくとも中々進歩するものである。

かうしてやつておく事が兒童の將來に、又國家社會家庭の將來に又國民樂の建設、一般文化の進歩向上に如何に意あり價値ある事であらうに。

私は樂器練習の絶對に必要なことを信ずるものである。

E、常識教育

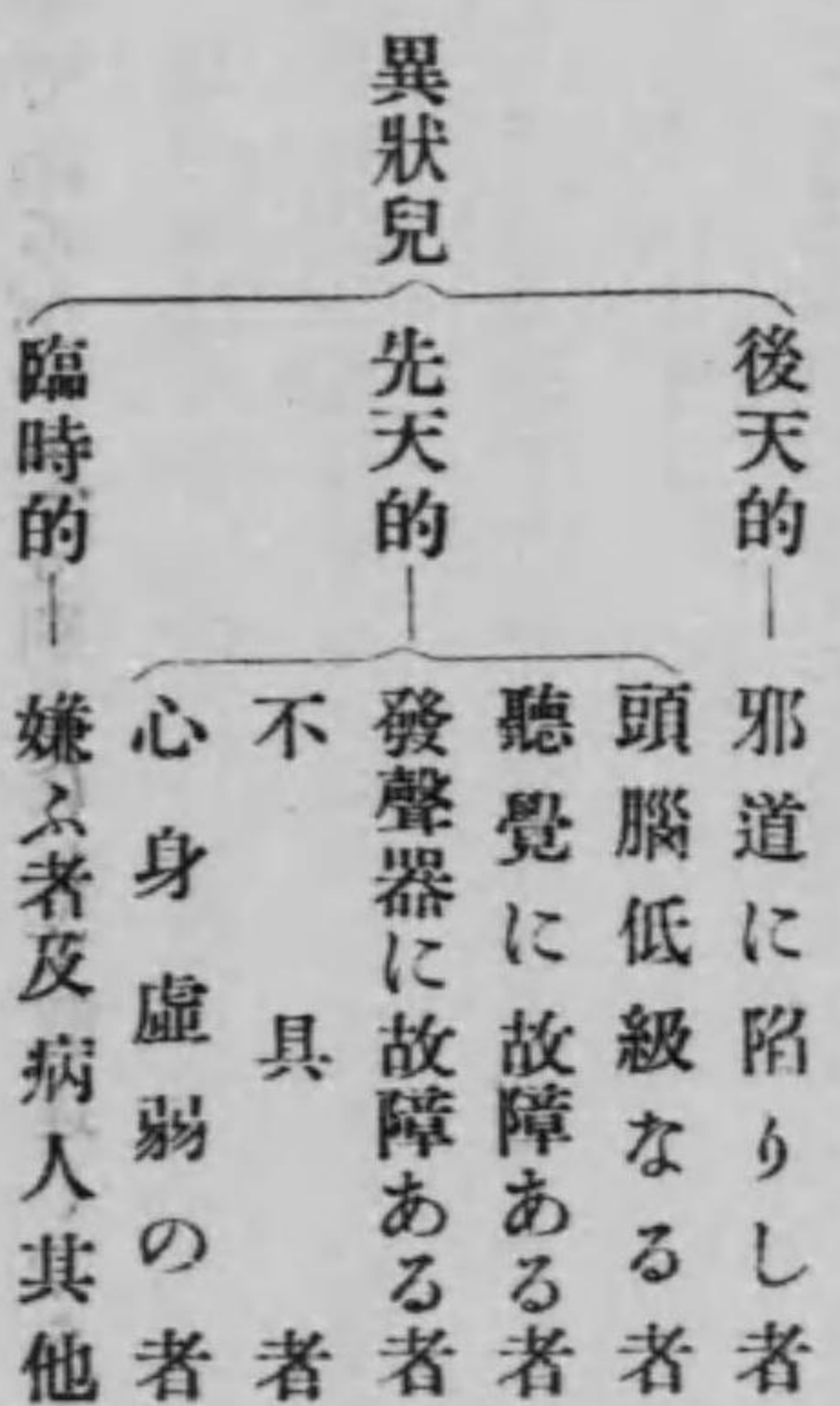
音樂藝術に關する一般常識教育も、此期に於て主としてやるべき重要なる方面であるが、之に關しては章を別にして述べる事にする。

F、作曲及鑑賞

作曲も鑑賞も此期に於てこそ一層力を入れやらねばならない事であり、又可能の事であるが、之も別章に於て詳述しやう。

第十章 異状児の取扱ひと其救済

本科教育に於ける異状児(敢て劣等児と言はない)に相當するものを大體分類して見ると次の如くなるであらうと思ふ。



A、邪道に陥りし者

教師其人を得ず、教育方針を誤り又は無定見無方針の出鱈目教育等をして遂に尊

き兒童の心身に傷をつけ、或は悪い方向に向はせられたといふ様な可愛想な兒童達である。或場合には家庭社會等の影響からしてかうなつた事もあるであらうが實際教師の手でかうされた兒童も少くない。私もかういふ組の兒童を持たされて嘆息を漏らさざるを得なかつた事は一度や二度でない。

B、頭腦低級なるもの

他學科と共に所謂劣等児の中に入るものであるが、本科としてもやはり記憶理解力等に乏しかつたり、又引いて聴覺等の鋭敏を缺くものである。

C、聴覺に故障あるもの

全くの聾者を始として一般聾者に屬するもの、及神経系統に故障あり又頭腦鈍にしてか聴覺の鋭敏と正確とを缺くものである。

D、發聲器に故障あるもの

聲帯に故障ある者。

口腔・鼻腔・咽喉等音の響鳴腔に故障あり又は其動作に自由を欠き或は悪く習慣づけられたる者。

身體的故障例へば横隔膜の虚弱等より吃音となる等發聲に故障を來す者である。

E、不具者

盲生。

啞生。

其他の不具者。

F、心身虚弱の者

生來心身虚弱或は病氣等にて殊に呼吸器心臟等虚弱にて一寸唱へても疲勞したりするもの。

G、嫌ふ者及病人

唱歌音楽を嫌ふ兒童、及び病氣中の者、殊に風引等は最も多いだらう。

之等の異狀兒を如何に取扱ひ又救済すべきか、之は普通教育として重大なる事である。即ち之等をぬきにした教育は普通教育國民教育、即ち小學校教育の責任と誇りを捨て去るものであるから。然しまだ世の中にこんな教育の稍行はれてゐるのを甚だ遺憾に思ふものである。

私は次に各場合に亘り其取扱ひと救済について、私の經驗と研究より生れた考へを述べて見やう。

A、邪道に陥りし者

發聲法が、出鱈目であり又誤つてゐるのが最も多い。中には悪い誤つた發聲法に傾きつゝあるものもあるし、既に悪く習慣づいてしまつて固定してしまつてゐるものもある。そうしてかういふのは——教師が悪いのだから——大抵一學級殆ど全生舉つての場合であることが少くないが、殊に其悪く固定してしまつたの等は、救済に全く骨が折れるものである。けれど根氣強く救済してやるべきであつて、私の

經驗の中では一年間以上もかゝつたが、殆ど救済した事があつた。要するに其誤つてゐるところを指摘して自覺せしめるのが先づ第一の仕事で、それから正しい發聲の練習をなさせるのである。(正しい發聲法は第五章参照)

此の時特に注意を要するのは、強聲大聲を要求しない事であり、又歌曲其他の練習は出来るだけ簡單なものにして、徹頭徹尾發聲法に注意を集中せしめるべき事である。そして十分自分の聲を反省せしめ、訂正練習(弱美聲で)せしめて遂に無意識的にも美聲を出し得る處まで徹底させねばならない。又普通歌曲練習の時も發想等の要求は暫く黙許してやつて先づ美聲發聲の練習を第一にするのである。かうしてゐると一人二人と正しく又美しい聲の出る者が出来て来る。其時大切なのは其兒童を大に賞揚し、以て他の模範とし又他を勵ますことである。その中はこの良い方の仲間がだん／＼増して来る。かうなつて来ればもうしめたものだ。私はこの時良い者を集めて席を別にし、不正の者と區別しておいて段々良い組の

人數の増す事を獎勵した。一週に一人一月に五人といふやうに、段々良い組が増して悪い方が減じて来る。教師にとつても此時は本當に愉快であつた。良い組に入れた兒童は勿論喜んでゐる。かくして(四十人許りの尋二の男女組であつたが)遂に今(尋三の三學期)ではまだ悪い方に残つてゐるのは女二男七。他は皆一年幾ヶ月の間に殆ど正しく又美しい發聲をする様になつた。そして残つてゐる計九名といふ者は、もつと他の方法によらねば救はれ得ないところの異狀兒が大部分なのであつて、單に教育法の誤りから發聲が悪いといふのではないのである。私はこの經驗を眞に尊い經驗であつたと思つてゐるが、尋二の始め預つた時を思ひ出すと感慨無量である。

然し私は思つてゐる。之は比較的病の浅い中だつたからよく治せたんだと。高學年になつてからは一層骨の折れるものである事を覺悟しなくてはならない。耳の修練・陶冶・調整の出来て居らずして、どんな音であらうと自分の勝手の高さ

て平氣で唱へてゐる(一組の兒童を一所に唱へすと下手な合唱のやうになる)のもあるが、之は何でもよいたゞ歌ふ事にのみ熱中してゐて、聞くといふ事を忘れてゐる兒童に多いのであると思ふ。故に之は他に異狀がある處の本當に變調の兒童でない限り、聽くべき事の必要と態度方法を知らせ、反對に歌ふ聲は前同様弱美聲にして、常に歌ひながらも樂器の音や友人の聲や自分の聲を聽くやうに暫く習慣づけ、又他の音に自分の聲を合はす事等の練習をさせてゐると、直きになほつてしまふものである。然し之も勿論不斷的根氣のある教育法をとらないと、一度や二度では中々なほるものではない。

其他の事は大抵或事をたとへ誤つて教へられてゐたとしても救済は容易であらうと思ふ。

B、頭腦低級なるもの

どの學科でも、此種の異狀劣等兒の幾分存在する事は已むを得ない事である。若

し一級一般に低級なる時は、すべてを出来るだけ程度を低くしてやるより仕方ない。(一章参照)そして譜、殊に本譜等でいぢめるのは最もよくない事である。然し二三名の此兒童のために、一級全體を牽制し犠牲にするといふ事はいけないと思ふ。最大多數の最大幸福な途をとるより致し方がない。

然し低腦の理由は何か原因があつて、原因を除けば低腦で無くなるやうな兒童はよく注意して、其原因を取除いてやるとよい事は他學科と變りない。

C、聽覺に故障あるもの

音樂にとつて聽覺の故障程困る物は他にあるまい。目が見へないのはまだ聾者よりもよいわけである。若し啞でも耳がきこへるのであつたら、聾よりも本科の教育は可能なわけである。聾は全く音樂の敵である。

醫者で治療出来るものなら治してやりたいし、全く聾ならば殆ど本科教育不可能だから免じてやるより仕方がない。

少しでも聴く事が出来るのだつたら、樂器や教師の近くへ席をかへてやるとよいだらう。

最も救済するのに適當なのは、神経系統の聯絡の鈍い者であつて、かういふ兒童はやはり近くにおいて又常に注意して、耳より聴く音と口から出す自分の聲との反省自覺を促すと、遂には間違なく聴き、又間違ひなく發聲するやうになつて來る。然し之も随分根氣物である事には變りない。

D、發聲器に故障あるもの

聲帯に故障あるものは、殆ど醫者でも治すに困難であらうから致し方がない。そしてかく不治的に醜聲であるならば、他の妨害にならぬやうに小弱聲で歌はすのが最上の策である。

又口腭鼻腭等の共鳴腔にも病的故障があるならば、其病氣を治すより方法はないが、教師としては注意を與へると共に、やはり醜聲ならば弱聲で歌はすより外な

く、又歌はす事が一層有害であるならば、勿論歌ふ事を中止せしむべきである。音樂教育は單に唱へさす事のみに限らないから、他の方面に於て教育し發展させればよいわけである。然し此處に救済し得べき二つの場合がある。或は之はA項に相當するかも知れないが、個人的の場合が多いから此處で述べておく。

一つは幼時より自然的に悪い發聲習慣に固定してしまつてゐる者である。例へばあまへたやうな、即ち舌根が上つて軟口蓋の下つた、嫌な前方發聲の聲である。又或時は地聲を張上げた破鐘のやうな聲の時もある。まあ、それ程でなくとも後方發聲や前方發聲に過ぎた醜聲等は相當に多い。鼻聲の過ぎた習慣の者もある。然し其救済はかくの如く原因は明瞭であるのだから、其原因となる習慣を破つてしまへばよいので比較的樂である。個別的によく理解を與へてやつて、常に矯正に努力さすべきである。私の經驗中では胸聲を張上げる女の子二人は立派になほした事がある。軟口蓋の下るのも一人あるが大分となほりかけてゐる。

鼻聲の者等は何でもない。皆之と反對の方面からこの習慣を破つてやればよいのだ。(第五章参照)

次には所謂貧民的醜聲とでもいふのか。一向原因が明瞭でなしに醜聲である兒童がある。丁度酒や煙草をのみ過ぎたりした後のかすれ聲のやうなのであるが、之を或人は食物の關係から説明してゐたし、或人は身心の營養不良や元氣のない事から云つてゐたのだ。(勿論それ等も關係するのであらうが、然しさうだとすると之を救済するのは家庭が主であつて、學校では如何とも致し方か無いのだ)

處が之に對し、其原因と従つて其救済とに關し大なる光明を得た事がある。それは何かといふと、其醜聲の原因は實に兒童の環境境遇にあるのであつて、即ち常にその兒童の耳に入る音が醜聲雜音であつて——(家庭や社會の低級から)——その音は咽喉壁の或部分——(感じ易い點だらう)——に一種の刺戟を與へ——吾々

でも雜音醜聲を聴くと、確に一種の不快と刺戟を咽喉の邊に感ずる事がある——遂に其結果は反對に自分の聲を出す時にも、美しく響かない咽喉に變質してしまつてゐるのだといふ事である。之は確にヴァイオリン等でも言へる事であつて、即ち上手な人の響かしたヴァイオリンは、遂によく美しく響くヴァイオリンになるし、相當よいヴァイオリンでも下手に響かしてゐると、遂に妙音が出なくなつてしまふといふ事があるが、之と同様の事ではないかと思ふ。勞働者の子弟等に美聲の出る子少く、家庭のよくて上品な家の子には美聲の出る子の多いのは、主に此事に原因するからではなからうかといふ事である。

さうすると、之の救済法は何でもない事、即ち出来るだけ美音美聲を聴かせばよい事になる。醜聲で歌はす事より美しい音を聴かして置くのだ。そして習ひ性をなして遂に彼等の咽喉等が美音の刺戟により、美聲を出し得るやうに變質するまで聴かす方を主にする事である。私の學校でもこんな兒童は少くない。私は上手

な子の美しい音を一生懸命に聴いておれといつて歌はすことは稀にしてある。方法の簡單なるに比例してか、実績はさう容易に手早く擧がらない。何よりも一層根氣が入るのかも知れない。けれど一年でも二年でもやつて見る積りで居る。まだ結果はさう明瞭でない。けれど悪くはない。本人も自分の醜聲を自覺して努力してゐる。

E、不具者

聾者は前述の如く致し方ないが、他の不具者は大抵如何なる方法でなりと本科教育を施すところの方法はあると思ふ。盲生は一層音楽的に普通は敏感であるから音楽教育は一層適切であり可能である筈だ。歌はすこと、——(勿論普通の視唱は駄目だが)——聴かすこと、樂器練習、——(之も譜による事は出来ないが)——作曲、お話し、總べて可能である。即ち日本樂の師匠に盲人の多いのを見ても明白であらう。

啞生は普通聾者である事が多いから、其時は致し方ないが、啞生でも若し耳がきこへるのであつたら大に音楽教育をして、少しでも彼等の人生を豊かにしてやるべきであると思ふ。聴く事・奏く事・すべて可能だ。たゞ歌へないだけである。然し又方法によつては啞其事をも救へるかも知れないではないか。

准啞生とも言ふべき吃音者は確に救濟出来ると思ふ。横隔膜の弱小、呼吸の淺薄等が原因ならば、それを練習矯正してしまへば吃らなく、そして立派に唱へられるやうになるのである。(緩く深い呼吸法で)

其他の不具は餘り本科とは關係しないだらう。

F、心身虚弱の者

肺や心臟の弱い者は大聲や強聲は勿論、多くは唱へさせない方がよい。即ち病勢を進める事があるからだ。卑怯者、臆病者でよく一人歌つたり爲し得ない者は之は叱つても駄目だ。何でもないとはいふ氣持を起さすやうに導くのが最上である。

G、嫌ふ者や一時的病氣の者等及其他

本科を嫌ふのには種々の原因がある筈だ。嫌がる原因をよく聞いてそれを取除いてやればよい。嫌がるのを無理にやらすと尙嫌がるばかりである。自分の下手醜聲等を恥じての者もあるだらうが、之は一面尊い藝術心の表れてでもあるから上手に、又美聲にしてやるといくらでも好きになるのだ。

教材に嫌氣を起す事もある。性的の事からのもある。教授法の事からのもある。教師は兒童を責める前に、大に自省反省すべきである。教師の悪かつた事も少くない。

又唱へる事の不得手な兒童には、作曲に得意を得させるとか、樂器に興味を得させるとか、各其才能をどこかに表させてやると喜ぶものである。

私の組の兒童に聲の全く物にならないのが一人あるが、作曲といふと得意になつてゐるのがある。ハーモニカを吹く事の好きなのもある。何でもよい得意な方に

伸ばさしてやるとよい。

病氣の者等は勿論休まずべきだが、殊に風引等になると餘程重くても人と一緒に喉の痛いのを我慢して歌つてゐる事がある。大に注意を與へて後の爲身體のため

に歌ふ事を休まずべきである。私の學校では風引の者は、平氣で他人が歌ふ時でも腰掛けて休んでゐてよい事にしてある。

尙體操の後や運動した後、又は心身の疲れたり興奮したりした後の本科教育は其方法をよく注意すべきは言ふまでもない。

兎に角、かくして異狀兒には異狀兒相當の、そして適切なる教育法があるのだ。千遍一律、十把一束げでは教育でない。又其反對に異狀兒をぬき去つた教育も普通の教育ではない事を御注意ありたい。

研究會等で授業を見ると、一人も異狀兒のない教授を見る事が多い。もつと赤裸々

本當の教育であり研究であつてほしいと思ふ。

第十一章 成績考査

藝術教育としての本科、更に唱歌にあらざ音楽なるを以て其眞面目とし、従つて自己を謠ふ事を以て謠ふ事の眞義とし、或は樂譜樂典教授等をして相對的價値と見る著者の本科教育は其成績考査の上にも從來普通の考査を以てしては満足し切れないのは理の當然である。

發聲の良否、記憶の良否、それ等のみが私の考査の對稱となる唯一のものではない。それならば生れつき偶然的に發聲發音、音色等がよかつたり家庭周囲の良かつた爲によい聲の出たりする兒童は、生れ乍らにして全く成績優等に定まつてしまつて、貧乏人の子や遺傳的發聲不良の子や、盲生啞生は絶対に不良となつてしまふわけだ。勿論前者は専門音楽として立ち得る素質を有する點に於て後者に優り、又技巧の點に於ても後者を抜いてゐるであらう。けれど小學校の本科は専門音楽家の養成を目的として

ゐるのではない。一般國民に對する普通教育、人にまでの教育としての藝術教育であり音樂教育である筈だ。音樂家も其中に存在してゐるかも知れないが、直接それを目的としてゐるのではない。技巧は専門家にとつて統對に必要であるが、普通教育としての藝術教育、音樂教育にはそれ程までに必要な事ではない。鑑賞し、味ひ得るだけの藝術心・耳・情操だけでも本科教育の目的は達し得られてゐる。

歌ひ得なければ、普通教育としての本科の目的は達し得られないのでない。例ひ歌ひ得ないにしても藝術心・鑑賞力・等は大層豊富に發達してゐるかも知れない。音樂を聴くと直ちに假象界に逍遙して、其音樂に浸り陶醉してゐるやうな兒童もないとは限らない。

反對によい音色よい發聲で歌つてゐても、一向自分には無關心で丁度蓄音器の機械のやうに音だけを出してゐるに過ぎないやうな子供があるかも知れない。勿論聲のよいと言ふ事の如き技巧の一部にも、それだけ優る點があれば成績の上にもその點に於

て優る事は明かであるが、全部に於て優つてゐるのでは決してない。記憶力とか言ふ方面に於ても同様である。

要するに、技巧記憶とか言ふ様な點も考查の對象の一部分を占むるのであるけれども、其全部ではなく其兒童の音樂的藝術心・鑑賞力・情操といふやうな無形的方面の顧慮が重要である。

否其方が小學校に於ては重要であり根本的である。

尙歌へなくとも樂器に、作曲に其技倆を發揮し、情操を陶冶してゐる兒童は少くない。

成績考查或は獎勵や注意を與ふる事は、其全範圍に亘るべきであると共に、根本的（普通教育としての本科の目的より眺めて）であらねば、遂に其教育を毒する結果になるのであらう。

第十二章 児童音楽會

音楽會が音楽教育の爲に、如何ばかり効果あるものであるかは、喋々するを要しない事であらう。近頃頻々として此種の會の各地に開催せられるやうになつた事は眞に慶賀すべき事である。——唱歌會或は音楽會の名の本に、一校に於ては小會大會或は學級音楽會等、更に數校或は郡市縣聯合の上、盛大なる勢を以て。

然し此の結構な音楽會も、若し其方法を誤つたならば、即ち藝術的にも教育的にも其効果を失するのみならず、却つて弊害を残すものである事を注意せねばならない。音楽會開催についての一般的方法是、色々と述べられてある書物も少くないやうに思ふから、私は以下六項其注意すべき諸點を擧げて、此種の會を催さうとさる方々への参考に資しておかう。

(一) 児童本位である事

吾々のやるかゝる音楽會は、先づ第一に専門的純音楽家のやる専門音楽の會でもなければ金を得る爲の會でもなく、即ち児童本位教育本位——(教育本位と言つても、非藝術的といふ事ではない)——でなければならぬ事である。

勿論金を得る爲の會と同視する程の事はなくとも、大人の爲即ち來賓のため、教師のため等の様になる事が多いものである。

私の學校の児童音楽會の趣旨を擧げて説明にかへやう。

●●●●● 児童音楽會趣旨

○本會は全く児童の爲の児童自身の會といふ事を以て原則としたい。

○會員とでも云ふものを考へて見るならば、それは當日會合して出演或は鑑賞する児童がそれであつて、大人の都合の爲に正會員に等しい児童達が、或點を犠牲にされる等といふ事はやりたくない。

○従つて父兄も一般社會人も入場を拒絶し、只児童を預る教育者のみは歓迎する。

○縣下小學校兒童の出演來聴を希望歓迎する。けれ共決して競争比較等の事は考へてゐない。どこ迄も兒童自身が出演する事及仲間の者の演ずるのを聴く事其事に至上の目的を持つてゐる。

○先生達の出演は或程度迄はよい事だと思つてゐるから歓迎する。

○以て楽しい彼等の音楽デーたらしめたい。

よく大人の音楽會に變化をつける爲に、子供にもやらせよとか、來會者が多くなれば兒童は退場せしめてしまへとかいふ風の會がよくあるものである。

又學校でやるこんな會であつても、よく父兄のため、教師のため、或は來賓、監督官の爲の會である事が時々あるものである。

總べて是等の會を無用とも無効とも申しませんけれ共、兒童教育を任とする我々の催す事としては、餘りにこんな事のみが多くて、肝心の兒童本位の事は極めて少いやうに思ふのは如何でせう。

私はどこまでも兒童本位をモットーとしたこの會を、もつと／＼多く開いてやりたいものだと思ふ。

(二)準備練習の弊

音楽會がいつあるといふので俄に周章狼狽、放課後或は夜迄も、時には他の時間をまでもつぶして、俄練習を強ひる事は最も弊害が多いと思ふ。

平素の練習が即ちそれに當つてゐるやうなのでなければならぬ。特別に會のためには俄に練習さすのは、遂に其爲に音楽其物迄兒童が嫌ふやうにしてしまふ事が少くない。音楽趣味及養成の爲の會がそんな事の爲に、音楽其物を毛嫌ひさしてしまふやうな事はまことに矛盾した事であらう。

非教育的も甚だしいと思ふ。

(三)兒童の音楽・藝術である事

聴衆の無理解や突飛な名聲を博さうといふやうな名譽心や何かの爲に、無理に聲音

の強大を欲したり、突飛な材料を以てしたりして非藝術的非教育的、そして又非兒童的にしてしまふ事がよくある。

兒童の聲音並に藝術は共に兒童的である。大人のやうな強大な音は兒童には出ないのが當然だ。ホールに響かなければ響かなくともよい。聴衆が拍手しなければ拍手しなくともよい。無理を強ひる方がどれだけ悪い結果を來すかを考へねばならない。

現在兒童らしき聲音の兒童は、將來音量ある大人としての聲音の持主となり得るのだ。現在強ひられて聲を壊した兒童は、將來其音聲美を失つてしまふものである。

わからない愚衆は拍手を送つてもミュージズの神は怒り給ふ事を忘れてはならない。又そんな聴衆等に媚びんとするやうな、そして兒童に無理を強ひるやうな教師があつたならば全くの罪人である。

ホールを完全にし(よく兒童の聲でも響くやうに)聴衆を制限又は訓練し、確固たる識見を以て兒童の世界の會としなければならぬ。

(四) 歌曲の程度

兒童本位の、そして又兒童の世界の音樂會である限り、其音樂會に殊に兒童の演奏歌唱する歌曲音樂等の程度は自ら言ふまでもなく決定される。

けれど吾々凡人の常として、ついつまらない或物が動機となつて、高級高尚——程度の高い、そして又一風變つたやうな曲目等をやらさうとする事は往々にしてあるものであり、其結果は非教育的非兒童的、時には全く滑稽に迄陥らしてしまふ事があるものである。

敢てプログラムの曲目で驚かさうといふのでも無からうが、理想?に走り過ぎたり新しさをてらはうとしたりして、遂に自分や子供の力といふもの、兒童の世界といふものを忘れてしまふのであらう。

注意深き教師は、兒童平常の力量の七八割程度のものをやらす位ひである。力一杯のものをやらすと平常練習の時は十分出來たものでも、いざ演壇上に立つた時、兎角

其の出来榮が平常練習の時の如くには良くないものである。大人ですら聴衆や來賓等に何となく氣がおけるのであるもの兒童に於ておやである。殊に又控室休憩室等がなくて、心身共に疲れたり變になつてゐる時に、直にやらされるの等に至つて尙更である。故にどうしても平常の七八割の力しか出ないものだ位に考へて 其材料を稍程度を下げておくといふのが注意深き教師にとつては當然の事である。

然るに、兒童自身は愚か教師にすら困難(十分やるには)なやうな高尚高級なものや又程度の平素よりも高いやうなものをやらす等に至つて無謀である。

進行曲位ひ理解も出来又やれる生徒兒童に、それ以上のものがどうしてやれやう。

童謡位ひが最も適當な兒童に、何でオペラ物等謡はせれば謡ふからとてやらされやう。——(天才ならば別として)

自分に於てすら理解出来ないものが、どうして聴衆に理解出来るやうに表現出来やうか。

私は兼て某音樂會に於て、尋四の女生にジョセランの子守唄——オ、夢、さむるなよ——を助奏附で唱はせたのを聞いた事があつた。而も不自然と無理とを寄せ集めた叫ぶやうな聲を出さし、又意義も價値もない。従つて全く兒童自身の感情とは無關係な發想で

又尋五の女生にニーナの死を、やはり殆ど前同様の様子でやらせたものであつた。

そして丁度其時、女子師範の本科四年の者も漸くにしてジョセランの子守唄をやられたのであつた。

其子が天才ならばいざ知らず——然し天才だつたら、もつと／＼上手だつた筈と思ふ——全く何の事だかわけがわからなかつた。まるで教育の仕事作曲藝か見世物と同様に思つてゐるのかも知れない。

それをやらして得意になつてゐる先生こそ全く太平樂なものである。

お酒が美味しいからと云つて、子供に吞ませやうとする親があらうか。藝者遊びが

面白いからとて子供を引張つて行く親があらうか。大人には美味であり面白い事であり、又一面價值ある事であつても、子供には美味しくも面白くもなく、返つて大に有害である。子供にはお菓子が美味しく又友達と兵隊ごっこして遊ぶのが面白いのだ。そして又價值もあるのだ。

全く世界が違ふ。單なる程度といふ位ひの事ではなくして、世界が違つてしまつてゐるのだ。

繰返して言ふ。

子供には子供の世界があり、

子供には子供の藝術があり、

子供には子供の程度がある と。

然し子供に混じて教師が出演する時には、聴手が兒童であつたとしても、稍程度が高くてよいのは勿論である。餘りと懸離れたものは不適當だが、稍程度高いのを聴か

せて理想の向上に資す事は有効又必要である。

(五) 曲目の分量

曲目—プログラム—番數の分量は、徒らに多いと疲勞退屈を感じしむるものであるから注意しなければならぬ。

殊に幼い子供達は一層疲勞し易いものである。

五六十番—時間で云へば四五時間もあるのは不適當である。——(途中で休憩があつても)先づ多くても三十番前後、時間では二三時間——(續けては尙いけぬ)。適度なのは二十番位ひ、一・二時間位ひであらう。

一度に多量にやるよりも、小量宛數回の方が確に良い。

(六) 設備準備

音樂會場の設備については前に述べたから更に申さないが、實際會を催し、又自分が出演して最も困るのは、ホールの悪いのと共に控室の無い事である。私は出演者の

休憩等する控室は、聴衆の場や來賓の休憩室等が無くても設けねばならない程必要であると思ふ。ホールに次ぐ必要なものである。寒い又は暑い會場に居つて、直に出演しなければならぬ事程嫌な事はない。上氣して調子の上つてしまふ事等はこちらである。全く無謀だ。

尙次には其控室に樂器と共に、麥湯か砂糖水の用意及び冬等は手を暖める湯が必要である。

お菓子はなくともよい。又茶等は返つて迷惑至極だ。手が冷へて指が動かないのにピアノを奏くのもつらいし、茶を吞んで獨唱する等は無茶である。

然もその控室が會場と餘り遠くなくして、音の聞へないやうなのが理想的である。

第十三章 設備

普通の設備事項については私は述べる事 省略する。そして私の本科教育の目的より、又出來得る限り理想的に眺めて必要と思ふ設備事項のみを述べやうと思ふ。

教室其他室の方面と、樂器其他用具の方面とに分けて考へて見る。

特別装置を有する音樂室の必要は申すまでもないが、私は更に音樂會等に使用する音樂堂の必要を痛切に感ずる。勿論小學校では講堂兼用より仕方がなく、又それで十分であらうが、よくある體操場との兼用は無いより良いだらうが十分ではない。まして教室を打通したやうなのは駄目である。音樂會等に出演してこんなホールに案内され、出演を強要せられるのは實際苦しい。嫌である。出る者にとつても聴く者にとつても加減が悪く、本當の音樂等は出來るものではない。どうも建築家にも設計者にも要求者にも音響學的の考慮の少いのが從來日本の建築物の缺陷である。天井の低い事

横巾が狭くて縦が長く細長い事、反射響面の出鱈目等が其大なるものである。今後は、少くも之等の事を改良せられたい。演壇に立つて見ると頭がもう天井につかへるやうな氣持のするのや、ずっと前方が穴の中のやうな氣持のするの程いやな事はない。尙華美に陥る必要はないが、相當美しさを考へねばならない。美しさといふよりも人の氣分を落附く嚴肅に導き、又平和にやらせるやうな裝飾が必要である。あまりに日本の小學校の教室は殺風景だと評されてゐる。殊に藝術的陶冶を目的とする本科教室等は殊更である。もう少し金をかけて高尚優美にしてもよいと思ふ。又床に毛氈を敷く事は衛生的にも必要である。尙劇等も行はれて來たから、之に對する例へば幕や控室等の設備も之等教室に用意出來たらよい。

又教壇演壇等も普通のより大きい廣いのが必要である。尙之は土地による事だが防寒的の設備も切に要求する。寒さに振ひながら手や足を凍らし、口唇を紫色にし顔を青くして歌はされてゐる児童を見ると、全く何んのために何をしてゐるのかとさへ思

ふ。藝術は寒い中にも暑い中にも生れるであらう。けれども之を鑑賞享樂し練習するにはそれは堪へられない。私の地方等では冬はストーブ位の必要はある。(音楽室だけ)寒さ暑さに抵抗する鍛練の事は勿論必要であるが、音楽は直接それを目的とするものでは斷じてないのである。

児童用椅子や腰掛の類ももう少しはよくしてやりたい。他に使つた餘りの腰掛の寄せ集めや、廢物利用等は御免だ。單に腰掛けられたらよいといふのでは物足りない。尙腰掛は七八歳の児童も十四五歳の者も腰掛けるのであるから、其高さ等は大層面倒であるが、私の學校では前の方のは八歳の児童位のとし、順次高くなつて最後列のは十四歳位のによいやうにしてある。殊に奥行を深くして中央を稍凹にし丁度停車場のベンチのやうにしてある。色々考へた結果であつて、少々低い目の腰掛でもかうしてあると安樂に腰掛ける事が出来るからだ。尙後のもたれは必要である。何處かで丸腰掛のものを見た事があるが、餘りに不安定不安樂で、ゆつたり腰掛けて鑑賞や作曲等

の出來難いやうに思つた事があつた。藝術であり音樂である。少くも音樂の時間は總べてが藝術的であり音樂的でありたい。記譜用の机も入用だが、前の腰掛の後に取っけ式のをする時は蝶つがへに注意すべきだ。直にとれてしまふ事がある。私の學校のは鐵棒のつがへになつてゐる全く堅牢である。

黒板も背面黒板や小黒板が必要だ。少々美的なのを。

樂器ではオルガンとピアノ（ピアノがあつてもオルガンは入用である）尙其他に私は第一に蓄音機の必要な事を主張する。蓄音機については章を別にして申述べたいと思ふが、蓄音機なしで本科の教育は不可能であると思ふ位だ。是非共蓄音機を一臺は備へたいと思ふ。——出來るだけ上等なのを——そしてそれを入れるのと臺にするのと兼用の箱でもこしらへて、何時でも使用出來るやうにしておくべきである。（勿論極上等になればそんな箱はいらないが）理科室にある蓄音機は到底常に利用出來ない——理科室には無くとも音樂室には必要である。

従つてレコードの入用な事も申す迄もないが、之も出來得る限り良いのを澤山集めておくといふ。（どんなレコードを集むべきかは第十四章参照）

第二に私の必要を主張するものは兒童用樂器である。簡単なオルガンか——（五年以上位には各級少くも一臺宛）尙ピアノが備へられたらほんとうに理想的だ。

ヴァイオリンも有つたらよい。ハーモニカ等は自辨の方がよい。

私は私の本科教育觀からして、これ等設備の必要を絶叫するものである。

第十四章 蓄音機

一、蓄音機の利用

蓄音機の發明發達と共に、漸次其應用される方面が廣くなつて、既に今日では單なる娛樂用の時ではなくなつた。教育用、醫療用として又色々學問語學等の研究用として、或は實業能率増進用として、各種の方面に其價値を發揮してゐる事は周知の事であらう。

尙今後この輕便經濟的にして又價値の多い機械は、何處まで發達して何處まで應用されるかわからないけれど、私は先づ一日も早く我國の小學校全部に行渡つて、國民が皆之を利用したよりよき音樂を受けるやうになり、延いては吾國民樂の勃興を一時も早からしめる一原因たらしめる事を望んで止まないものである。

故に本章に於ては、特に小學校音樂教育用として蓄音機を如何に利用するかに關す

る私の考へを大略述べやうと思ふのである。

先づ小學校音樂教育に於て、如何なる場合に利用出来るかを考へて見ると、大體次の如くにならう。

- A 鑑賞用。
- B 音樂常識教育用。
- C 教授用。

A 音樂鑑賞の必要なる事は申す迄もないが、其節蓄音機を利用する事の又得策有効なる事は誰しも認むる事であり、私も既に鑑賞と其取扱ひの章で述べた事である。故に取扱ひの方法は該章を参照され度く、また使用するレコードに關しては、本章の一覽を參考されたいが、此處では其他に關する事柄を少し述べて置かうと思ふ。何も之は鑑賞の時のみに限つた事ではないが、注意して蓄音機を取扱つてほしい。

其樂曲の種類性質に依つて、針と廻轉數及び響鳴室や扉の加減を注意する事が必要

である。

針については追つて述べるが、種々あるから適當なのを用ふべきである。

同一曲でも針を換へる事のみによつても、頗る其氣分様子に變化を來し、又時によつては針の爲に曲を無茶にしてしまふ事があるのである。

廻轉數は普通一分間八十一—八十二・三回と云つてゐるが、何時でもそれで最上なのではない。

殊に又廻轉數の如何は調子(曲全體の音の高さ)及び速度に大關係を來すものであるから、うつかりやると樂曲を壞すのみか、遂には滑稽にしてしまつたり、機械レコード迄も無茶にし、又子供の感じを悪くしたりする事がある。

又途中で廻轉速度に變化を來すやうな不注意な事は最もいけない。又扉がある機械ならば、そのどの程度の開け方が最も其室に又曲に適するかを考へる必要がある。送音管の中に綿やハンケチ等を入れて、音の強さを加減する事も出来るのである。

よく之等の事を注意して取扱はないと、鑑賞の目的も達し得られない。

不慣れの者等は、教授前十分研究しておいて、其場になつてうるたへる様な事の無い様にしてほしいものである。單に教授鑑賞を立派にやらせられないと云ふのみならず、實際機械やレコード迄駄目にしてしまふものである。

更に其鑑賞は傾聴享樂を越へて、身體的舞踊的享樂迄行く事があると言ふ事は注意したい。

それは舞踏や律動遊戯のための蓄音機利用でなくして、鑑賞の極致自然としての表情であり律動であるから、やはり鑑賞の爲、音楽の爲の舞踏や律動になるのである。

(うたの原始的考察参照)

又或時には鑑賞と云つても、單に其曲中の一部分(よい部分のみといふ事もあるが)即ちメロディーの美のみとか、リズムの愉快さとかのみを主にする事もある事を注意したい。

幼學年には盤一枚全部すむ迄聴かす事は無理な事もあるし、又総合的だと云つても出来るだけ簡単に考へさせて(指示して)聴かす方が適當な事も多いのである。私は之等もすべて鑑賞の中に考へてゐる。

B 第八章に述べた常識教育に於て、蓄音機を利用する事の避くべからざる事は云ふ迄もない事であつて、蓄音機が無かつたら出来ないと云つてもよい位である。追つて擧げてあるレコードを利用する事によつて、最も如實に最も趣味的にわかり易くやるべきであつて、理窟をこねまわしての單なる知的取扱ひなら、却つて有害である位である。

C 更に又動機の惹起や大様の把握理解や、部分的練習等も、蓄音機によつてよいのを聽かせて新教授する事も、或場合——教師の示範等のあまりに拙劣不正のある時等——には適切である。

殊に上手な子供の發聲や謠ひ振(發想等)を参考とさす事は有効である。

大人の男子の煙草や酒を呑んだ後を様な、ガサ／＼のヒー／＼聲で示範しても、子供は何處に長所要領を見出せるのであらうに。

却つて悪い感化を及すかも知れない。それ等の教師の實際未だ本科の教授にあたつてゐる限り、良い蓄音機は新教授用練習用としても十分に價值がある。

誰か「蓄音機が無ければ子供が育たない」といふ。之は主に學校教育の事ではなく家庭教育の事であらうが、私は更に學校教育にも亦大人の生活にも通用する事であつて、即ち蓄音機を利用する事によつて、我國では最も簡單に又頻繁に良音楽に大人も接して、情操品性の陶冶より人格の圓滿豊潤、更に音楽心の培養陶冶よりして將來我國々民樂の勃興に至るにあらざれば、我國をして遺憾なき完全なる文化國たらしめる事が出来ないであらうと思ふ。故に私は此の意味に於て「蓄音機が無ければ日本が育たない」とまでも極言して、蓄音機の利用を我國教育界を先づ初めとして、更に家庭及社會に奨めたいのである。(經濟的なると機會を與ふる事とは最も我國によい)

今日の家庭には相當普及してゐるやうだが、俗悪低級な利用法が多いやうだし、學校にはまだ普及してゐない。健全有効なる利用を伴つた普及をはかつて、この簡便にして我國狀に適した文化的機械の機能を、我國内に發揮せしむる機會を少しでも多くする事は、それだけ我國をして成長せしむる事だと思ふ。

以下機械、レコード、及針に關し、主として學校用選擇の參考となる事を述べておかう。

二、機 械

蓄音機は二百數十年前、フランス小説家某の空想物語りより二百二十四年、今より僅か約五十年前に初て米國のトーマスエヂソンによつて創められてから、急速の進歩發達をなして、頗る精巧優秀なものを製作出来るやうになつたが、其主なるものにはエヂソン、ヴァレンス、エオリアレボカリン、チニー、フランスキック、ヴィクター、コロンビヤ等がある。

然し優秀なのは随分價格が高くて、ヴァレンスの九百五十圓より下がらない等に至つては、到底普通現今小學校には手に入れ難い感があるが、又下等品殊に和製のものには随分安價なものも多く、三十圓前後で相當立派に見へるやうなものもあるのである。けれ共之等は又理科説明用や子供の玩具位ひならばよいけれど、到底教育用音樂用としては不十分な事は申すまでもない。

然らばどの程度が最もよいかといふと、私はヴィクター、コロンビヤ等の百五十圓以上五百圓前後頃のものが多いと思ふ。輕便であること、堅固であること、經濟的であることが精巧優秀であること、共に、學校用としては必要である。數千圓するやうなのは優秀でもあるが、多くは金銀其他細工で室内裝飾用としての部分に手數が入つてゐる事によつて高價になつてゐるのであるから、必ずしも小學校には必要ない。ヴィクターやコロンビヤの百五十圓以上五百圓位ひのものになれば、音色等も頗るよいし正しい。そして輕便であり又經濟である。チニー、フランスキック等は縦、横波共用

になつてゐて便利だが、相當價も高いし稍精巧過ぎるといふ話だ。小々無理をしても破損故障の起らないやうな方がよい。精巧なのはよい代りに故障が起り易いものである。殊にヴィクターの學校用として特別に製作してゐるの等は先づ理想的だと思ふ。尙買求める時の注意としては、

1. 音色の良いもの、機械等の完全なもの。
2. 十二吋レコードもかけられる方がよい。
3. 針をさす穴が竹針(三角)にも都合よいもの。
4. 針を止める仕掛がバネよりラセンの方がよい。
5. 機械廻轉雜音の少ないもの。
6. 音の強弱や廻轉速度加減のよく出来るもの。
7. 學校用としては喇叭附がよい。

三、針

針の種類も色々ある。會社にもよるが總合して考へて見ると材料からは、

1. 鋼鐵製。
2. タングステン合金製。
3. 竹製。
4. 寶石製。
5. 骨製。

等ある。鋼鐵製は普通一回、タングステンは二三十回、竹製は一回(但し又先をなほせば數回)寶石製は殆ど永久使用にたへるが、針の節約はレコードの損失になるのが普通であり、又強い(寶石等)針もレコードにはよくないのであるから、學校では鋼鐵製と竹製位ひでよい。

又針は其音の強弱によつて種々ある。ドイツのヘロルド會社製等は數種に分れてゐるが、其他のでも三四種に分れてゐる。舉げて見ると、

最強音、強大音、強音、中強音、弱音、弱小音、最弱音。

等になるが、種類の少いのは其中のどれかに屬するものがぬけてゐるのである。尙一本の針で強弱二様に使用出来るものもある。

一般に廣い部屋では強音針を、狭い處では弱音針を用ふるべく、又聲樂は弱音針の方がよく、器樂は強いのがよい。けれど器樂でもヴァイオリン曲等は弱い方が良いのが多く、又曲によつても子守唄やセレネード等は弱いのを、元氣勇壯なマーチ等は強いのがよい。

尙聲樂には竹製の針が弱くもあり、又金屬性の音がなくてよいようである。然し又レコードによつて針の一定したのもあつて、例へばバテイ會社エヂソン會社には玉針を用ふべき等がある。

四、レコード

レコード選擇に當つては又一層注意を要するが、文部省推奨のは社會的又は一般的

だから、小學校音樂教育用は又それとして別の見地から選擇しなければならぬ。又同じ小學校音樂教育用としても、鑑賞用か説明用か等に從つて違ふから、よく目的を考へて選擇する要がある。

ピクタレコード中の適當なのを擧げて見ると、

◎子守唄のものに

- ブラームス作子守唄 一八六六四
 - モスコウスキー作セレネード 六四五七六
 - グーベル作静な夜 一七八四二
 - シューマン作トロイメライ 六四一九七
- ◎リズムカルなものに
- グレットリー作ガボット 六四一九八
 - ポツバー作ガボット 四五一一六

◎平和な気分のものに

サンサーン作白鳥

六四二六五

ペーティン作田園シンホニー

三五三二〇

◎凝念的のものに

ペーティン作第五シンホニー第二章

三五二七五

ヘンデル作ラルゴ

七四四一二

サンサーン作レヴェリ

三五六六八

◎目覚めるやうな行進曲に

サンサーン作佛軍行進曲

三五六六八

◎標題樂中わかり易いのは

時計屋の店

三五三二四

玩具のマーチ

五五〇五四

裁縫師と熊

一八五九八

森の鍛冶屋

一七二三一

森の中の狩

三五三二四

ワグネルワルクユレの魔術の火

三五三八七

チャイコフスキー一八一二年

英一二二及一二三

◎管絃樂組織を示すのに

オーケストラの各樂器(第一種)

三五二三六

同(第二種)

及三五二三七

同(第二種)

三五六七〇

同(第二種)

三五六七一

◎各國音樂の特質顯著なるものに

伊、伊太利國歌

一六一三六

サンタルチヤ

一六八八二

タランテラナポリタナ

八八三五五

西、スバニツシユダンス

六四五五六

佛、マルセーユ曲

六四六九三

ビゼー・ラルレジエヌ組曲

三五四六一

オー・クレール・ド・ラ・リュース

八七五〇九

獨、ローレライ

八八五四七

トロイエリーベ

八七〇二一

露、カマリンスカヤ

一七〇〇一

コレグルニヤグンカ

六三一五三

ポ、クラカウ舞曲

一八〇〇二

シヨツパンマズルカ

六四二二四

瑞、スエーデン國歌

一六五九六

スエーデン結婚進行曲

三五一五九

スエーデン民謡

六三四二九

諾、ノルウエー國家

一六五九六

ノルウエーの山の進行曲

一七一六〇

ノルウエー民謡

六五九三一

英、英國々歌

一六一三四

モリスダンス

一七〇八六

英國古舞曲

一八〇一〇

米、オールドフォークスマイホーム

一六三八九

インジャンの俗謡

一七六一一

黒奴の歌

一七六六三

◎西洋音樂の發達史的のものには

(代古) (中世宗教樂) (中世複音樂) (文藝復興)

- 古代ユダヤ音樂 一七七七一
- 古代ギリシヤアポロ讚歌 三五二七九
- ギリシヤ宗教樂 六三五一一
- グレゴリアンチャント 六一一〇九
- 聖ヨハネの讚歌 五五〇七二
- カロロ大帝の讚歌 五五〇七二
- 最初のカノン樂 三五二七九
- 十字軍時代のトラプアトールの歌 一七七六〇
- オルランドラツリオの歌 一七七九三
- パレストリナ作宗教樂 一七五四八
- ベリ作最初の歌劇ユーリジチエ 五五〇五一

(興時代) (十八世紀前期) (十八世紀)

- モンテヴェルデ作オペラオルエヲ 四五〇八三
- スカラツチ作ハープシコルド曲ソナタ 英 二〇四
- ラモール作鶯の歌 七四二四九
- バッハ作ハープ曲フーグ 英 四九一
- バッハ作ヴァイオリンコンセルト 七六〇二八ヨリ
- ハンデル作メシア 七六〇三〇
- 同 ハレルヤコーラス 三五四九九
- 同 ハイドン作ミヌエツト 三一七七〇
- 同 ミリタリーシンホニ 六四一三五
- モザルト作魔笛序曲 三五三一〇
- 同 ト短調シンホニ 三五五二〇
- 同 ジュピターシンホニ 六八二〇七
- 同 ジュピターシンホニ 三五四八二
- 同 ジュピターシンホニ 三五四八二
- 同 ジュピターシンホニ 一七七〇七
- 同 ジュピターシンホニ 三五四三〇

後 グルック作オルフェオ

六四〇七九

ペーリーベンエグモンド序曲

三五四九三

(期 同 フェイスフルジョンニ

七四四二九

同 第五シンホニ

八九三九二(四枚)

(田邊氏に據る)

其他最近來朝のエルマン、クライスラー、ジン、バリスト、ハイフェツ等の演奏レコード、亦故カルーソーの吹込レコード等名人を紹介する意味のものも必要であらう。尙コロンビヤレコードの中で、兒童向で面白いのはバッブル、ブックとリットルレコードである。

バッブルブックは、お伽唱歌的のもので、各輯に分ち、一輯五吋半片面レコード三枚一組(四圓)家畜の輯だとか蛙と鳥の歌の輯だとかになつてゐる。

バッブルは稍幼年程度過ぎる感があるが、リットルレコードの方は確に小學校には

良いと思ふ。之は即ち器樂としての子供用レコードであつて、合奏や獨奏物の子供に適するものである。

我國のレコード製作も漸く盛況に及び、技術も大層進歩して比較的良いレコードを製出するやうになつた。殊に教育レコード、兒童音楽レコードの方面に努力するやうになつた事は、吾々にとつて最も喜ばしい事である。製造會社を列舉して見ると

鷺 印	東京	日本蓄音器商會
ヒヨキ印	東京	帝國蓄音機商會
富士印	東京	三光堂
オリエント	京都	オリエント商會
ツバメ印	大阪	日東蓄音機商會
鳩 印	尼崎	東亞蓄音機商會
日 英	神戸	日英商會

エトナ 大阪 エトナ 商會

東京 日本教育蓄音機協會

等である。

各社のレコードを合せて見ると頗る澤山であつて、選擇しても随分繁雜であるし、又日々新レコードが製出されるのであるから、買ひ求めやうとなさる方は各社のカタログを取つて選擇し注文してもよく、又販賣店で一度聞いて見て買へば、一層安全であるから、此處では一々載録しない事にして、たゞ選擇に當る時の私の考へを數ヶ條述べておく事にする。

(1) 各社によつて亦各製品によつて、レコードの成績出來榮は一定しない。故に出來得る限りよいのを——音色吹込がよく雜音の混らず、堅牢にして容易に曲つたり壞れたりしないもの。

(2) 小學校音楽教育に價値あるものといふと、童謠や唱歌風のものばかりと思はれるかも知らないが、私は之等も勿論良いが、器樂の獨奏や合奏や管絃樂的のものを先づ第一に集めたいと思ふ。

子供の獨唱等ならば自校の子供に唱へさせれば本物の鑑賞が出来るから。

(3) 然し各社の共に童謠物は大概良いと思ふ。けれ共肉聲の再現は蓄音機にとつて最も困難と云つてもよいのであるから、總べて獨唱合唱等は最も機械にも針にもレコードにも注意して買ひ、又取扱ふべきである。悪いレコードや悪い機械では金屬性の音や、變になつた聲音に再現されるのが常である。むしろそんなのならば聽かせない方がよいと思ふ。本物が幾らでも出来るのだから。

(4) 大人の獨唱物や唱歌物の中には、ともすれば程度の相當しないものが多い。即ち内容樂であるから、其歌詞の内容は兒童相當の物でありたい。即ち原語の物等は原則としては勿論排すべきである。

(5) お伽歌劇や歌劇物は、周到なる注意の下に買ふべきである。お伽歌劇の方は幼

稚過ぎる事や下品な事が多く、又單に滑稽であるといふに過ぎずして、音樂的藝術的價值あるものは少い。歌劇物は之もあまり兒童に相應しないのが多い。藝術的ではあり音樂的ではある(有名な歌劇は)けれど、兒童に適當なのは少い。

(6) 軍隊喇叭は二三枚あつてもよい。

(7) 管絃樂物は先述の通り最も好い。殊に私の經驗によると君が代行進曲や軍艦行進曲等の如きわかり易くて、又快活なのが最も喜ばれた。海軍々樂隊の等は一層うまい。但し日本物(曲が)のものは餘りいらぬ。日本物は又日本樂器ので少しあればよい。

マーチ、ダンスミュージック等、リズムや旋律の割合に明瞭で又美しいのが良い。

(8) 獨奏物ではヴァイオリン物及ハーモニカ物がよい。勿論曲其物はよく選擇する必要がある。ハーモニカの獨奏は簡單なので、幼學年には管絃樂のものよりも良い位に思ふ。

其他音樂其物よりも樂器を照介する位ひの意味で、各樂器の獨奏物を一枚宛位ひ求めるのもよい。

(9) 合奏物ではピアノ、ヴァイオリンのがよい。純日本曲を之等洋樂器でやつたのも多いがあまり感心しない。日本化された洋樂——(洋樂器化されて創られた日本精神の曲——千鳥をヴァイオリンでやるのは、日本樂器でやるべき曲を直ちに洋樂器でやるのであつて、私はこんなのを感心出來ない——)のものなれば最もよいが、左もなくばわかり易い純洋樂がよい。

(10) 純日本物は標本的に各種一二枚宛あればよいと思ふ。内容樂が多いから注意すべき事は云ふ迄もない。歴史的のものか國民的のものがよい。全く代表的であるから。

(11) レコードには尙其外に色々あるが、音樂的には又兒童用には無用である。俗歌俗謠物は大抵良くない。之等も無用である。

(12) 尙日本音樂史を研究し、又は照介するのによいのは古典保存會又は日本蓄音器商會の古典レコードである。

古代の神武天皇作久米歌や東遊、奈良朝時時の高麗樂納蘇利、白濱や林邑樂胡飯酒、陪臚や隋唐樂賀殿、越天樂や平安朝の催馬樂更衣や朗詠嘉辰、東岸等は求めて研究して見たいと思ふ。

徳川時代のは幾らでもある。

第十五章 教師諸君へ

私は第一章に於て手段の多様を論じ、如何なる兒童及教師にても、其兒童及其教師に即したる方法手段を選ぶに於ては、可能にして最大の効果を有する音樂教育の出來得る次第を述べた。

けれどもそれは現實論である。現實である處には自ら現實の悲哀がある。決してそれで以て満足は出來ない。樂天も出來ない。各音樂教師は各自に於て其現實より一步にても理想に向つて進む事に努めねばならない。よりよき手段はよりよき結果を産むのである。

よりよき手段を探るには、其手段に自由にまで自己の音樂的總てを向上さすより方法はないのだ。即ち各音樂教師の音樂的修養の向上は、何れの方面より考へても必要な事に違ひない。

以下本科に關係する教師に望む諸點を擧げて見やう。

(一) 本科蔑視輕視の蒙を啓け。

校長はもう本科等は少々知つてゐても知らん振する。(事實今迄わからん屋が多かつたんだらうが) 首席になつてすらい事のやうにそんな眞似をする。まゝ若い者でやつてくれ給へと得意氣になつてゐる。視學が來ても結構くゞで濟まして行く。美術や讀方の成績が悪いと青くなつてゐるが、兒童の聲等はどうかだつたつてよい校長や視學が少くないのだ。全くこんな蠻的東洋豪傑流の事は、少しも早く我教育界から消へて欲しいものだ。到底それでは文化國の理想にまで我國を進ませ得ないから。田舎紳士文化的野蠻人の譏りをいつまで甘受してゐる積りなのか。

又一體教育者とは云ふものゝ、教育といふ事を何と考へてゐるのか、それから先づ伺はねばならないやうな氣もする。

先づ最小限度に於て少くも蔑視、輕視する事だけはやめてもらひたい。——殊に校

長視學等に於て。

即ちそれは單なる自己の愚を表すだけでなく、延いては部下職員及兒童にまで頗る迷惑を及すものであるから。

(二) 趣味を有し音楽を愛する教師

次には、先づ第一歩として少しくも音楽に興味を有し、音楽を愛する教師である事を望む。

自分はやれなくとも音楽を愛することか出來得れば、先づ校長や視學でも大した迷惑にはならない。

好きこそ物の上手なれといふ事もある。趣味があれば上達もある。愛があれば眞の理解も生ずる。

現在の上手下手は大した問題でない。先づ趣味と愛とを有する事こそ、視學校長及本科教師にも其第一要件である。

(二) 先づ單音で立派に奏けるか

こんな事を申すと笑ふ方があるかも知れません。然し笑つて居られる方々は勿論結構として、とても笑つて居られない人々、而もそれで以てやはり音樂唱歌を教へねばならない人々が少くはないでせう。

私はそれ等の方々に先づ之を希望するのである。即ち先づ單音でオルガンなりピアノなりが奏けるやうになれと。少くもそれでないと本科の教育は出來難いでせう。假りにどんな田舎としても、又どんな低級な兒童としても。

然し單音で奏けるといふ事には、尙稍注文があり條件がある。以下三つの其條件を申上げやう。

(一) 本譜で奏ける事。

樂器の略譜では本當に不便です。否遂には不可能でせう。何と云つても今の處本譜より良いものはありません。だから又よく本譜に假名や數字をつけて奏く――

即ち略符に翻譯して奏くのは、決して本譜で奏けるのはありません。

即ち階名奏でなくて、線奏又は音名奏でなければいけません。

(二) 視奏力あること。

(一)が出來れば必然的に出來得る事ですが即ち、新しい曲(單音で先づよろしい)を見て殆ど直に誤りなく奏ける位ひの力――視奏力――がなくては教授に不便です。譜を暗記してからでなければ奏けなかつたり、鍵盤に字を書いておいたりするのでは駄目です。數回も練習しなければ單音ですら奏けないのではたまりません。勿論譜とキイとを代る番に見たり、數を繰つてゐたりするのは殆ど教授は出來ないでせう。

(三) 或程度の移調に自由。

天氣模様や兒童の様子で、何時聲域に變化を來して、爲に一・二音或は半音、上下に移す事の必要が突發して來るかわかりません。

無理してやれば兒童を害します。移調しても誤りだらけでは奏く價值がありません。却つて邪魔になるかも知れません。

即ち自由に移調出來て、然も誤りなく奏けるのでなければなりません。單音ならば極く簡單です。

即ち之等の事に自由な單音での演奏が出來ないと、樂器を使つて教授するのに不便や害が多くなつて困るのである。換言すれば、樂器(オルガン・ピアノ)の最小限度の使用力を養ふ事と云つてもよい。

(四)教師技能の練習

聲樂に器樂に其練習研究は幾らやつてもやり過ぎになるといふ事はありますまい。更に良教師につき得るならば尙結構だが、獨りでも或程度迄はどしどしと進める。

其人が深く練習すればする程、教授としての場合に其よりよき方法が生れるのであり、又よりよき方法に自由となり得るのである。

それにつけても又無理解な人々が、その練習してゐるのをまるで遊んでゐる居るかの様に見へるのは本當に腹立たしいものである。こんな人達は小説を讀むと悪い等と思つてゐる人と同じ仲間の人達でせう。先づ相手にしないより仕方がありません。

然しかゝる教師の力の問題は、師範教育の改造からしてやらねば到底そう多く望まれない事と思ふが、近頃一校内より更に數校或は郡に於て、又は同好者に於て協同して研究する事等の起つて來た事は結構な事と思ふ。

(五)音樂的常識を養ひ識見を高める事

何によらず常識の廣く識見の高いのは必要であるが、特に音樂に於ては——殊に我國の音樂教育に於ては一層其の必要を痛感する。

即ちともすれば俗惡に流れやうとしたり、又贅澤物に見られようとしたり、或時は不當の輕蔑を受けたりする日本の音樂に關係するのであつて、一層氣をつけないと教育を誤つたり、又音樂其物を邪道に導いたりする事になる憂ひがある。

(六) 信念を持つこと

技能は劣、知見は狭くとも信念ある教師は本當に尊い教師である。目的に方法に、必ず自己に即した信念を以て兒童の前に立つべきだと思ふ。

知識技能に教育されるのでなくて、人格信念に教育されるのでせう。出鱈目の、定見なき、教育程兒童を害するものはありますまい。

(七) 感ずる教師は其總てである

ウォールガスト曰く「藝術教育に於ては方法はともかくとして藝術的に感ずる教師が其凡てである」と。感じなき教師は無いでせうが、又本當に感じられる教師は少いでせう。教師に望む最高級の條件としたのもそこに意義を持つてゐる。

單なる心理生理學的の感じは誰でもあるが、藝術的の感じは中々望まれません。ヒステリックや疑心の強い感じでは困つてしまふ。

即ち美を美とし、醜を醜とする藝術的敏感鋭敏こそ尊い最後のものである。

先天的の事が多いのでせうか修養の結果にもよる。私等は此處まで到つてこそ稍満足すべきであると思ふ。

附 録

一 家庭の音樂

近時我國に於て、専門非専門に關らず、音樂或は音樂趣味の普及向上し以てそれが勃興の機運に向つて來た事は驚くべき程であつて、先に彼のヴァイオリニストエルマンを始として世界的名士の續々渡來、我國都人士等を酔はしめたる事を以てしても、亦一般社會のヴァイオリン熱、ハーモニカ熱等の盛なのを以てしても、之を證するに十分なるものであらうと思ふ。

然し翻つて之を他の方面即ち科學の發達、體育熱の普及或は同じ藝術方面に於ける文學・美術等と比較して見た時に、同じく西洋文化の洗禮を受けて以來約半世紀餘のものでありながら其消化の程度に於て、國民性に根ざしたる程度に於て、従つて本當の意味の普及の程度に於て、最も遙々たるものである事を否定し難いのを遺憾とする。

エルマンの藝術も、結局我國に於てはプロレタリアのものでなかつた。尙國民性云々の點に於ては我國民のものでなかつたとも云へる。即ち眞にエルマンの藝術に酔へたかどうかは疑問である。参考にはなつただらう、驚きもしたであらう、けれど酔へなくては本當でない。酔ふ事の出来る音樂こそ本當に我々の音樂でなければならぬのだ。又街頭に立つて貫一ち宮を種に物もらひに近い事をするあのヴァイオリニスト兼聲樂家及び其心酔者程度の普及は、音樂の普及とは云へないだらうし、在來の日本樂と雖も、このまゝでは現在及將來の日本人を酔はすに十分なるものとは思はれないではないか。そう考へると、露西亞の誰か「日露戰爭後」日本は露國に勝つたけれど日本には音樂がない」と空つぶやいた事は本當であつて、恥かしいことであると思ふ。

こゝに於て國民音樂の建設こそ、現人及將來の國民の國家的責任であり急務であるが、其建設に當る外的力は學校教育と、家庭社會の教育がその主なるものであるとすれば、家庭での音樂即ち家庭音樂には、普通考ふる娛樂・趣味・慰安・享樂以外に、この

重大なる意義をも併せ者へなければならぬのであると言ふ事になる。私は以下これ等の考へのもとに家庭音楽に對する所思を述べて見たい。そして眞に健全なる姿と本當の意味に於ての音楽の普及、及以て國民樂の建設に資する事の大なることを祈るものである。

A 先づ家庭なる點に於て、家庭的に共通的でなければならぬ。即ち老も若きも男も女も、共通のものでなければならぬ。共通的な程家庭音楽として理想的なものであると云へる。主人が好きでも、女や子供に好かれないものはいけない。感傷的な女の好きなものでも、元氣な子供や男に適しなくては尙一層いけない。大人にして始めて興味ある事で、小兒等には有害なものも世には多いが、之は家庭に入れるのは危険である。この意味に於て淨瑠璃・謠ひ・等(之等も廣く音楽と見て……以下同じ)は多く不適當である事が多い。主人は興味があつても小兒や婦人は面白くない。そして其享樂の仲間に入れないといふ事が多い。或は害のある事もある。又洋樂的のもので

もかく内容樂——即歌詞のついてゐるものになると、餘程選擇しないと一方に偏したり不適當であつたる事が多い。年頃の青年男女の喜ぶ事でも老人幼兒には興味がない場合もある。大體こんな考へると、日本樂にしる西洋樂にしる、内容樂よりも形式樂の方がよいのである。

形式樂即ち音其物に——音の進行・配列・調和對比等——に興味の存するものゝ方がよい。形式樂には年齢性別等による差別は内容樂よりもより少い。即ち共通的であり普遍的である。小學校教育等に於ても、其點より考へねばならない事が多々あらうと思ふ。

B 次には家族の和樂享樂慰安の本旨よりして、音楽の性質に對する考慮が入用である。音楽の性質とは其音楽が元氣快活なるものか、憂鬱情弱なものか、發展興國的なものか、淫靡忘國的なものか等いふ事である。元氣快活發展興國的なものゝよりよき事は論ずる迄もありますまい。一家の空氣を淫靡に憂鬱に導くものであつたなら

ば、家庭に入るものとしては頗る危険である。一家の風潮は忽ちにして社會一國の風潮に關する。日本樂(殊に徳川時代日本俗樂)の中には、この危険に陥るものが比較的多い。又それが内容樂なるに到つては一層である。

C 又家庭の音樂は享樂慰安であると共に、國民樂勃興の外的教育的力でなければならぬといふ上から、國民性と距たることより少いのがよい。勿論國民性其儘即ち吾等日本人の魂に、ピッタリするものが理想であるけれど、國民樂のない今日は距ること少きを以て満足しなければならぬであらう。

切角聽くことが異人の寢言其儘であつては興味も起らない。此の意味よりすると一般日本人の前で、原語でうたつて得々たる者の馬鹿らしさがむしろ滑稽に思はれる。

D 更に享樂をして享樂たらしむる上から、即ち魂と魂をピッタリせしむるといふ上からして、時代相なるものに考へを致さなければならぬ。

鎌倉徳川の忠義を其儘に現代人に説いたら、随分わからなく感銘を來さん如く、音

樂にもこの時代の想がある事は必然である。

忠義でも同じ日本人の忠義であり乍ら、過去と現代とは大變な差がある如く、同じ日本人の日本樂と云つても、今昔によつて昔の日本樂に現代人はピッタリと魂を一致さす事は出來難い。

即ち古人の魂と現代人の魂とは、進歩があり變化があり、従つて差があつて、其儘に一致するものではない。

前項のを水平的に魂の一致と見るならば、之は縦斷的に魂を一致さす事についての考慮と見られる。

F まだ色々考へればあるかも知れないが、後一項に於て樂器の方面より簡單に論じて筆を擱かうと思ふ。

家庭に於ける音樂に於ては如くなる樂器によるのがよいか。勿論それは其人による事だから決定する事は出來ず、又決定しても仕方のない事だが、普通に考へればピア

ノ・オルガンが最もよい。之についてはヴァイオリン・ハーモニカ・笛・尺八・琴等も先づ結構と云はねばなるまい。然し之等は經費の點に於て、又技術の點に於て困難の生ずる事が多い。そう考へて理想的なのは、自動ピアノ・オーケストラ・ホーンにあらざして蓄音器であらうと思ふ。蓄音器に關して述べにかゝれば、中々こゝでは盡きそうもない。だから今は簡單にしておくが蓄音器ほど輕便にして經濟的、そして理想的なものはないと思ふ。數百人の合奏・合唱も、東西古今の（死んだ人例へばカルソー）名人のも居ながらにして、わづかの費用で皆が隨時に何回でもさけるのである。こんなものが他にあらうか。

今日の日本人は先づ此蓄音器によつて耳を養ひ魂を養ひ、以て享樂と共に國民樂の建設に向はねばならない。

或人は言つた「蓄音器なしでは子供が育たない」と。私は言ふ「蓄音器なしでは日本人が育たない」と。

二 國民樂の建設

音樂に各國民性の存する事——民族的個性の存する事——は既に述べた。國民性民族性個性の無き所に藝術はなく音樂は無い。西洋樂を聽いて我々日本人が一向しつくり感じのないのはそれがためだ。此點から言へば純日本樂は確にしつくりする。西洋樂心醉者が本當に分りもしないのに、洋樂でなければと言つて、日本樂を何でも彼でも駄目のやうに言ふのは心無き事だ。日本樂には熊公も八公も感鳴する。洋樂は餘程洋樂的修養の出來た者でないと十分わからない。感鳴しない。

然し、然らば純日本樂を大にやればよいではないか。日本樂があるのに國民樂の建設もなにも無いと云ふ方もあるであらうが、其處には又困つた事即ち在來の純日本樂は餘りに現代的ではないといふ事がある。今日の文化人は普通在來の純日本樂に満足しない。其精神はともかくとしても規模に於て樂器に於て、又音樂としての發達の程

度に於て到底洋樂に匹敵すべくも無いから。

吾々現代日本人はかゝる意味に於て、洋樂にも純日本樂にも不滿を感じてゐる故に必ず其處に、満足出来る吾々現代人の日本樂・國民樂を産み出すべき所以と責任が存するのである。

即ち日本精神を盛るに進歩したる洋樂器を以てした音樂が出来なければならぬ。かくて全日本人が醉ひ得る——勞働者も學者も——音樂が出来てこそ、本當に音樂の機能も發揮されるわけなのである。

然しよくある千鳥や六段を、ピアノやヴァイオリンで奏いたからとて、又それ等を學校でやつたからとて、國民樂が出来たのでもなく満足出来るのでもない。元來藝術的表現には先づ其手段に自由である事が必要條件である。音階——西洋音階——にさへ異國氣分を伴ふやうな様では程遠い感がする。何とかして同化——我物とする——事を早くして之等に慣れ、更に之等を手段として吾々の魂を表現した音樂が出来ると

うにならなければならぬ。近來童謠の勃興して來た事は最も此點に於て意義ある事であるが、童謠と同じやうな氣分によつて、ソナタもシンホニーも出来るやうに早くなつてはしいものだ。即ち先づ我國の音樂は童謠の程度まで來たといふ事にも考へられる。

吾々小學校音樂教育も、此處に考へを及す必要がある。

即ち童謠が教材として意義あるのは勿論であるが、又鑑賞——器樂等——を多くし或は樂器に慣れしめる等して同化に努める必要もあり、一面又創作せしめて吾々日本人の感情を洋樂的材料手段により表現する事に慣れしむる事も必要である。

全く考へて見ると、未だ殆どかく洋樂紹介の時期のやうに思へるのは遺憾此上も無い事ながら、之も理想への一段階ならば致し方もない。よりよき方法をとつて理想實現を一日も早からしめる事に努力するより仕方がないのである。

私の本書に於て述べた教育法は頗る此點よりの考慮を致した結果のものである事を

小學校に於ける音楽藝術教育
附記して終りとする。

小學校に於ける
音楽藝術教育

〔終〕

大正十四年八月十五日初版印刷
大正十四年八月二十日初版發行

小學校に於ける音楽藝術教育

定價金二圓五十錢



著者 西田 敏 郎
東京市京橋區入舟町五丁目一番地
發行者 藤 原 惣 太 郎
東京市京橋區南八丁堀三丁目十番地
印刷者 山 崎 治 兵 衛

發行所 東京市京橋區入舟町五
振替東京一八五一三番
明治圖書株式會社
賣捌所 東京 林六合館 大阪 柳原書店

(製本部……關根・中條・製本)

(所刷印社星七 部刷印社會書圖治明)

272
65

終

